REQUIEM PROJECT

活動 15 周年記念コンサート

レクイエム・プロジェクト神戸2023

～阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震、広島、長崎、そして多くの被災地への思いを込めて～

写真：活動10周年記念コンサート（2018.01.21 於：神戸文化ホール・大ホール）

主　　催：レクイエム・プロジェクト実行委員会、レクイエム・プロジェクト神戸実行委員会
特別協賛：株式会社 ケー・エフ・シー
協　　賛：三菱UFJ銀行、（有）平中鉄工所、（株）アイビーオフィス
協　　力：和田 忠＜グラフィック・デザイン＞、（株）エムプロジェクト＜配信・収録＞

2023年 1/15（日）
開演 午後 1時45分
開場 午後 1時00分

会　場 ： 神戸文化ホール・大ホール

ごあいさつ

作曲家・レクイエム・プロジェクト代表：上田 益（うえだ すすむ）

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。

神戸で2008年に始まったレクイエム・プロジェクトも、おかげさまで活動15周年を迎えることができました。昨年は長崎が活動10周年を終え、11年目に入りました。今年は仙台と北いわてがそれぞれ活動10周年を迎えます。

東京と佐用町はすでに活動13年目に入っています。

これも活動に賛同し、共感していただいている各地の合唱団員、実行委員の皆さん、先生方、そしてご来場くださる方々に支えていただいてこその15年です。心から感謝申し上げます。

さらには2010年以降、毎年特別協賛を続けて下さる株式会社ケー・エフ・シー様をはじめ、三菱UFJ銀行様・有限会社平中鉄工所様はじめ、協賛下さる皆様の支えがあればこそです。重ねて御礼申し上げます。

神戸で始まったものが、自然災害や戦争で傷ついた被災地に広がり、活動開始順に神戸・東京・沖縄・兵庫県佐用町・長崎・広島・仙台・南相馬・北いわて・気仙沼の10箇所で活動を行ってきました。現在もそのうちの7箇所で一年を通した活動を継続しています。

「継続は力なり」と言いますが、それも支えがなくては難しいのも事実です。ここまで支えてくれた妻に、心から感謝したいと思います。そしてすでに両親が他界して長い私を、実の子供と同じように励まし、支えてくれた義母に、心から感謝します。

プロジェクトが始まるまでには、阪神・淡路大震災が発生した1995年1月17日から13年間というとても長く大切なプロローグともいうべきプロセスがあります。実際にはその期間も含めた28年に及ぶ軌跡が存在しています。

本日はこれまでの活動のほんの一部分しかお伝えできませんが、このプログラム冊子や演奏曲目を通して、少しでも活動の意味を感じていただければ幸いです。

最後に、河北新報記者として長年東日本大震災被災地の人と土地を取材し、退職後も被災地の取材を続けるローカルジャーナリスト・寺島英弥さんが、このプロジェクトを端的に表現して下さった言葉をご紹介たいと思います。寺島さんは拙作・混声合唱組曲「また逢える」の詩を書き下ろして下さった方でもあります。

音楽という方法による記憶の記録と伝承、発信と共有。
その活動は、形を変えたローカルジャーナリズム

レクイエム・プロジェクト実行委員会

代表：上田 益、副代表：高田 薫

レクイエム・プロシェクト神戸実行委員会

実行委員：青山佳弘、青山真理子、浅野美佐子、高田裕子
コンサート運営サポート：武貞育子、村上純子

プログラム

司会・ナレーション：高田 薫

＊ 楽曲は全て上田益の作曲で、全音楽譜出版社から刊行されています。
＊ 合唱はレクイエム・プロジェクト「神戸いのりのとき合唱団」および活動各地の合唱団有志です。

第１部　活動各地のピアニスト８人とともに辿る被災地の詩人との合唱作品

❶ 仙台プロジェクトで生まれ、昨年９月に初演した
寺島英弥さん作詩による合唱作品
混声合唱組曲「また逢える」全４曲より

指　揮：上田 益
ピアノ：林 葉子、ゲイル徳子

また逢える

大切なものを喪（な）くすから 人は悲しむ
私にとっては あの子 私の命
だれの声も届かぬ闇に 私はいた
光の差さぬ世界で 泣いていた

命も消えかけた その時 私は確かに聴いた
「また逢える」 だから生きろと
「いつか逢える」 だから生きろと
精いっぱいの命を生き
その先で あの子は待っていると

哀しみなさい 泣きなさい
哀しみのなか あの子は生きる
哀しみは 私の愛
あの子の愛

光の先の あの子に導かれ
残された この生（いのち）をたどる

また逢える
いつか逢える

魂となって逢える日まで

このいのち 明日へ

天明の代の同胞（はらから）たちが
冷たい雨の夏 実りなき田に泣き
望み失い 道に伏し 家を捨て
されど わが祖は 荒れ野に鍬（くわ）を振るった
そして われら ここに生（せい）を受けた

新たな苦難が降り注いでも
思い継ごうと 私はこの地に戻り
荒れ野耕し 鍬振るい 種をまく
あの子らが この地に還る日のために

長き日々をかさねて
ふるさとに 生かされてきた
きっと還る 約束の旅

このいのち 明日へ

❷ 沖縄プロジェクト以来、多くの作品を共に創作している
詩人・伊波希厘さんとの女声合唱作品メドレー

指　揮：佐伯康則
ピアノ：倉片 明、大井里菜、鎌田章子

今この時を	児童（女声）合唱組曲「今この時を（全４曲）」より（部分）～
道	女声合唱組曲「４つの愛のうた（全４曲）」より
しおり	女声合唱組曲「心のアルバム（全４曲）より
はじまりの日のうた	児童（女声）合唱組曲「今この時を（全４曲）」より

今この時を

ささやかな願いを込めた
初めての種をまいたら
だれかに　そっと話したくなる
さりげない約束を告げる
初めての花を見つけたら
だれかに　そっと教えたくなる
こころが動きだす

あの日の雲のかたち
ひたむきに手を伸ばした
そんなふうに
小さなひとつひとつで
世界はつくられていた

うつくしい贈り物みたいな
初めての雪が降ったら

あなたに　きっと見せたくなる
ゆずれない宝物みたいな
初めての涙こぼれたら
あなたに　きっと伝えたくなる
こころを重ね合う

あの日の思い胸に
よみがえり目をつむった
そんなふうに
大切なひとつひとつで
世界はつくられてゆく

たしかめる足あとのような
はてしない祈りのような
そんなふうに
大切なひとつひとつで
未来はつくられてゆく

そんなふうに
特別な今この時を
みんなみんな生きている

道

市場へつづく
アスファルト
照りかえす道
新しい日傘で
歩いてゆく母
同じ景色の中
泣きじゃくる
幼い私を見た
人混みに紛れ
母の背を探す
遠い夏の日が
重なる影法師
日傘さす母と
娘と手を繋ぎ
溢れくる歌は
声にならない
母となり母と
歩いてゆく道

しおり

指先に
冬の匂いが降りてくる

色褪せぬ街
プラタナスの並木道
言葉もないままに
会えなくなったひと

影が行き過ぎる
落ち葉とつむじ風と

梢を渡っていく季節は
何も知らぬそぶりで

こころに挟んだ
しおりを外すために

はじまりの日のうた

覚えていますか
朝つゆ乗せたつぼみに
そよ風はなしかけるような
はじまりの日のうたを

もらったばかりの名前
呼んでいたのは
ずっとわたしを待っていたひと
やわらかな光に包まれて
凛として咲きなさいと

わたしたちが地球で目を覚ました
命のはじまりの日のうたよ

覚えていますか
ひな鳥まるい巣のなか
日なたのにおいのような
はじまりの日のうたを

行ったことのない場所
なつかしかったのは
ずっとわたしを待っていたから
あたたかな光を抱いて
羽ばたいていきなさいと

わたしたちが地球で大きく息をした
命のはじまりの日のうたよ

覚えていますか
はじまりの日のうたを
命をありがとう

❸ 北いわてプロジェクトで生まれた 詩人・宇部京子さんとの作品から3曲

指　揮：上田 益
ピアノ：陶山薫子、菅原紀子、箭野純子

※女声合唱作品も混声で演奏します。

風のように	女声合唱作品集「風のように～三陸鉄道にのって～」より
とうさんに海	混声合唱曲集「ふるさとのうた、いのちのうた」より
三陸鉄道が行く	女声（児童）合唱のための「三陸鉄道が行く～小さな村の物語～」より

風のように

すごくすごく
くじけそうで
こわれてしまいそう

こおりついた白い夜
見上げる星屑

そう　あの日は
あんなに　ふざけあっていたのに

とてもとても
つらくて
涙もでてこない
v月も星も雲にかくれ
見上げる闇の夜

そう　あの日の
あなたのやさしさが　くやまれて

けれど
明日また日はのぼる
オレンジ色の朝日が　あざやかに
だから　つよく　つよく
風のように　やさしく
あなたはわたしの中で生きてゆく

とうさんの海

さみしいとき
うれしいとき

まよったとき
つかれたとき

とうさんの海に
会いにいく

とうさんとおなじ　歩幅で
すなはまを　あるく

とうさんとおなじ　背中で
かいがらを　ひろう

とうさんとおなじ　目線で
水平線を　みる

とうさんとおなじ　手つきで
はまなすを　たおる

とうさんの海は　わたしのふるさと
　ザッポーン　ザッポーン
　ザッラーン　ザッラーン

三陸鉄道が行く

赤いはまなす 浜辺の小径
君はとおい空のうえ
涙色の
海の向こうに日は昇る

行くぞ！ われらの三鉄（さんてつ）が
リアスの海を まっしぐら
リトル・リトル・リトル・トレイン
荒波こえて がったん ごっとん はしれ！

青い松原 きつねの小径
あの子はとおい空のうえ
涙色の
海の彼方に日は昇る

行くぞ！ われらの三陸鉄道
霧のリアスを つきぬけろ
リトル・リトル・リトル・トレイン のう む
濃霧けちらし がったん ごっとん すすめ！

❹ 神戸ルミナリエの楽曲から ……指　揮：上田 益

Alma redemptoris Mater	2022年開催、カッサアルモニカ
5声のアヴェ・マリア	神戸ルミナリエ2013より
Salve Regina	神戸ルミナリエ2018より

❺ レクイエム ～あの日を、あなたを忘れない～

阪神・淡路大震災から15年を迎えたレクイエム・プロジェクト2010に完成初演を行った、プロジェクトの中核となる楽曲です。

1 _ Introitus : Requiem aeternam
レクイエム・エテルナム

Requiem aeternam dona eis, Domine:
et lux perpetua luceat eis.
永遠の安息を　彼らにお与え下さい、主よ。
絶えざる光が　彼らを照らしますように。

Te decet hymnus, Deus, in Sion,
et tibi reddetur votum in Jerusalem
神よ、シオンでは賛歌ががあなたにふさわしく、
エルサレムではあなたへの誓いが果たされます。

exaudi orationem meam,
ad te omnis caro veniet.
私の祈りを聞いて下さい。
肉なるものはみな　あなたのもとに来ます。

Requiem aeternam dona eis, Domine:
et lux perpetua luceat eis.
絶えざる光が　彼らを照らしますように。
永遠の安息を　彼らにお与え下さい、主よ。

2 _ Kyrie　キリエ

Kyrie, eleison.
Chiriste, eleison.
Kyrie, eleison.
主よ、憐れみたまえ
キリストよ、憐れみたまえ
主よ、憐れみたまえ

3 _ Dies irae　怒りの日

Dies irae, dies illa,
solvet saeclum in favilla,
teste David cum Sibylla.
怒りの日、その日は。
世のすべては灰に帰る、
ダヴィドとシビラの証しの通りに。

Quantus tremor est futurus,
quando judex est venturus
cuncta stricte discussurus.
その恐しさはいかなるものであろうか、
審判者が来て
厳しく尋問される。

4 _ Occursus et discessio　出会いと別れ

日本語詩：上田 益　ラテン語訳：マリボンヌ・岡本

Occursus et discessio, ac si esset cometa.
Semper perpetuo magnifice
splenderet in cordum.
出会いと別れ
それは流れ星のようだ
心の中で　いつまでも　いつまでも
美しく　輝いている。

Ut ab tibi digressus eram,
multum tempus transitus est.
Bene te habes ? Friges ? Ego vides ?
Ego semper tuam memoriam
in delciis habeo.
あなたを失ってから
ずいぶん時間が経ちました。
元気ですか?
寒くないですか?
私が見えますか?
私は　いつも
あなたの思い出を　大切にしています。

5 _ Lacrimosa　涙の日

Lacrimosa dies illa,
qua resurget ex favilla
judicandus homo reus:
Huic ergo parce, Deus.
涙の日　その日は
罪ある者が裁きを受けるために
灰の中からよみがえる日です。
神よ、この者をお許しください。

Pie Jesu Domine,
dona eis requiem.
慈悲深き主、イエスよ
彼らに安息をお与えください。

Amen
アーメン。

6 _ Sanctus　サンクトゥス

Sanctus, Sanctus, Sanctus
Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt caeli et terra gloria tua.
Hosanna in excelsis.
聖なるかな　聖なるかな　聖なるかな
万軍の神なる主よ。
天と地は、あなたの栄光で満ちています。
いと高きところに、オザンナ。

7 _ Non oblivisco dolorem iste diei
あの日の悲しみを忘れない

日本語詩：上田 益　ラテン語訳：マリボンヌ岡本

Tam multae lacrimae,
tam multae stellae genitae sunt.
涙の数だけ
新しい星が生まれる

Non oblivisco causam lacrimarum,
Non oblivisco dolorem iste diei.
涙の意味を忘れない
あの日の悲しみを忘れない

Sanctus,　Sanctus,
Lux aeterna luceat eis.
聖なるかな　　聖なるかな
永遠の光で　彼らを照らして下さい

8 _ Agnus Dei　アニュス・デイ

Agnus Dei, qui tollis pecata mundi:
dona eis requiem.
神の子羊、世の罪を除きたもう主よ
彼らに安息を与えたまえ。

Agnus Dei,qui tollis peccata mundi:
dona eis requiem sempiternam.
神の子羊、世の罪を除きたもう主よ
彼らに　永遠の安息を与えたまえ。

Lux aeterna luceat eis,Domine:
Cum sanctis tuis in aeternum,
quia pius es.
主よ、永遠の光が彼らを照らしますように、
あなたの聖人たちとともに　永遠に
慈悲深き　主よ

Requiem aeternam dona eis, Domine,
et lux perpetua luseat eis.
Cum sanctis tuis in aeternum
quia pius es.
主よ永遠の安息をかれらに与えたまえ
絶えざる光が彼らを照らしますように。
あなたの聖人たちとともに　永遠に
慈悲深き　主よ

9 _ Lux procul　光の彼方へ

日本語詩：上田 益　ラテン語訳：マリボンヌ岡本

Lux　Lux　Lux　procul
Lux　Lux　Lux　integra
光　光　光の彼方へ
光　光　きよらかな光

festivitas
futurum　lucet　Lux　aeterna
やさしさ・・・
未来が輝いている　光よ永遠に

dubitatio,　dubium　oblitteramus
Lux　Lux　Lux　procul
苦悩　　苦悩を乗り越えて
光　光　光の彼方へ

10 _ Ad futurum movere　未来に向かって

日本語詩：上田 益　ラテン語訳：マリボンヌ岡本

Lux　Lux
Ad spem movere
Lux　Lux
Ad futurum movere
光、光
夢に向かって
光、光
未来に向かって

Lux aeterna　Lux aeterna
光よ永遠に、光よ永遠に

Sanctus,　futurum
Sanctus,　spes
聖なるかな　未来
聖なるかな　夢

Ut spem non abjicere
Ut speciem non relinquere
希望を捨てないで欲しい
夢をあきらめないで欲しい

オーケストラ・メンバー　長岡京室内アンサンブルと仲間たち

1st ヴァイオリン：森 悠子、髙木和弘、森住憲一、福澤里泉、永ノ尾文江、富永 扶
2nd ヴァイオリン：谷本華子、田中佑子、北吉 芳、宮崎万里
ヴィオラ：安積宜輝、高野ちか子、松﨑国生
チェロ：野村朋亨、中島紗理、神田真秀
コントラバス：三井脩平
フルート：水越典子、大江浩志
オーボエ：中江暁子、須貝絵里
ホルン：海塚威生、岡田喜美子
トロンボーン：河毛博子、喜井 宏
ハープ：村上ひろみ
ティンパニ：樽井美咲

プロフィール

上田 益（うえだ すすむ）…… 作曲、指揮

京都市立芸術大学音楽学部作曲専攻卒業。廣瀬量平氏に師事。京都音楽協会賞受賞。1980 年度文化庁芸術家国内研修員に選出され、東京において研鑽を積む。クラシック音楽の作品のほか、長野オリンピック・公式楽曲「WINTER FLAME」の作曲や神戸ルミナリエの音楽、「1 リットルの涙」「黒革の手帖」などのテレビドラマ音楽、NHKの番組音楽などを多数手がける。阪神・淡路大震災から15年となる2010年に向け、2008年より追悼と希望の合唱プロジェクト「レクイエム・プロジェクト」を神戸で実施。被災者自らが合唱団員として参加するその活動は全国10箇所に広がり、現在もその活動を神戸・東京・仙台など、全国の7つの地域で継続して行っている。合唱作品も多く、全音楽譜出版社、カワイ出版から合計23冊の楽譜が出版されている。
また海外でもレクイエム・プロジェクトのコンサートが行われ、2012年にプラハ（ドヴォルザーク・ホール）、2014 年にはウィーンの聖シュテファン大聖堂主催公式グランドコンサートにおいて「レクイエム～あの日を、あなたを忘れない～」などを演奏。10分間以上のスタンディング・オベーションが続き、教会でのコンサートとしては異例の反響となった。2016年9月には、バチカン教皇庁の特別な許可を得て、復興祈念・平和への祈りを目的としたレクイエム・プロジェクト「バチカン・イタリア特別公演」を実施。サン・ピエトロ大聖堂、システィーナ礼拝堂（以上バチカン）、聖フランチェスコ聖堂（アッシジ）、サンタ・トリニータ教会（フィレンツェ）で、国内各被災地からの合唱団有志と共に演奏を行い、大成功を収めた。またこれら公演に際し、新作「ミサ・ブレヴィス～平安への祈り～」（全音楽譜出版社）を、フランシスコ教皇へ献呈する栄誉をバチカン教皇庁より与えられた。2019年10月にはポーランド公演を実施し、シフィドニツァ、クラコフ、ワルシャワ各地で好評を博す。

佐伯康則（さいき やすのり）…… レクイエム・プロジェクト広島実行委員長、作曲家、合唱指揮者

エリザベト音楽大学作曲コース卒業。太田司郎、井上一清、ホセ・テホンの各氏に師事。後年スペインに留学し、バルセロナ市立高等音楽院合唱指揮科にてエンリケ・リボ氏に師事して、ルネサンス期のポリフォニー音楽を研究。帰国後、音楽教育者として活躍し、数多くのコーラスグループの合唱指導をつとめる。2016年9月、Tu es Petrusをローマ法王に献呈。

北爪かおり（きたづめ かおり）…… ソプラノ（神戸）

京都女子大学文学部教育学科音楽教育学専攻卒業。同大学大学院表現文化専攻修了。バロック、古楽分野やア・カペラに加え、ソリストとしてバッハ「ロ短調ミサ曲」「ヨハネ受難曲」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「レクイエム（パイプオルガン版）」、ブラームス「ドイツレクイエム（ピアノ連弾版）」、ロッシーニ「小荘厳ミサ曲」等で活躍。上田益「レクイエム」「神戸ルミナリエ」CD収録、プラハ、ウィーン、イタリア、ヴァチカン、ポーランド等海外公演にソリストとして参加。声楽アンサンブルVoice=Spective、Trinity Vocal Consort Japan、KANSAIBAROQUEメンバー。混声合唱団クールシェンヌ コンサートミストレス。神戸・佐用いのりのとき合唱団、日本製鉄混声合唱団、ホワイトハンドコーラスNIPPON、毎日文化センター等で指導。

本宮廉子（もとみや・きよこ）…… ソプラノ（東京）

千葉県出身。日本大学芸術学部音楽学科卒業。同大学院修了。フランスにて夏期国際アカデミーを受講。ヘンデル「メサイア」、バッハ「マタイ受難曲」、「ヨハネ受難曲」、ハイドン「ネルソン・ミサ」、モーツァルト「ハ短調ミサ」、「戴冠ミサ」、ブラームス「ドイツレクイエム」、フォーレ「レクイエム」、プーランク「グロリア」等にソリストとして出演のほか、バロックアンサンブル、フランス歌曲、日本歌曲を中心とした演奏活動を行う。2009年上田益「レクイエム」初演時より、神戸、長崎、仙台、プラハ、ウィーン、ポーランド等各地の演奏にソリストとして参加。レクイエム・プロジェクト「東京いのりのとき合唱団」指導メンバー。

小野綾子（おの あやこ）…… ソプラノ（仙台）

宮城学院女子大学音楽科声楽専攻卒業。ミラノ市立音楽院古楽科声楽専攻修士課程を首席で卒業。ヴィンチ国際バロックコンクール・独唱、室内楽部門共に第1位。ミラノ芸術音楽祭、ローマ・バロック音楽祭に出演。〈カント・ディ・オルフェオ〉他、スイスやポーランドの古楽グループの演奏会・録音にソリスト、アンサンブルメンバーとして参加。またヘンデル〈メサイア〉ベートーヴェン〈交響曲第9番〉ソリスト、モーツァルト〈ドン・ジョヴァンニ〉ツェルリーナ役等で仙台フィルハーモニー管弦楽団、山形交響楽団メンバーと共演。ヘンデルフェスティバルジャパン室内合唱団員、古楽アンサンブルイル・メルロ、Cantores Polaris、La Passacaglia所属。令和4年度宮城県芸術選奨新人賞受賞。これまでレクイエム・プロジェクト仙台、東京、長崎のコンサートにソリストの一員として参加。

栗木充代（くりき みつよ）…… アルト（神戸）

京都市立芸術大学音楽学部卒業、同大学院音楽研究科修了。兵庫県高等学校独奏独唱コンクール1位、友愛ドイツ歌曲コンクール3位、日仏声楽コンクールにて奨励賞、フランス音楽コンクールにてフランス総領事賞受賞。ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「レクイエムをはじめ、様々な宗教曲アルトソリストとして出演。2016年より連続ソロリサイタル開催。神戸音楽家協会、神戸フォーレ協会、ひょうご日本歌曲の会、神戸波の会、歌曲研究会ソワレの会、各会員。
神戸いのりのとき合唱団、すずらんコーラス等で、合唱指導、ヴォイストレーナーを務める。

八川浩子（やがわ ひろこ）…… アルト（広島・神戸）

エリザベト音楽大学宗教音楽学科宗教声楽コース卒業。同大学大学院音楽研究科宗教音楽専攻修士課程修了。声楽を益田遥、故鈴木仁、藤井美雪、頃安利秀各氏に師事。在学中に、定期演奏会、チャリティークリスマスコンサート、卒業演奏会、修了演奏会に出演。ヘンデル『メサイア』、ハイドン『ネルソンミサ』、ベートーヴェン『第九』『荘厳ミサ』『ミサ曲　ハ長調』、モーツアルト『レクイエム』等のアルトソロを務める。東京バロック合唱団、ドイツフライブルク大聖堂少年合唱団の演奏会にアルトソリストとして出演。また、CD「近代唱歌集成　聖歌の世界」（ビクターエンターテイメント）、「カルミナ・セークリ」、上田益作曲「4つの愛の歌」、神戸ルミナリエ2016会場音楽レコーディングメンバー。レクイエム・プロジェクト広島2015コンサート、および2019年「レクイエム・プロジェクトinポーランド～平和への祈り～」にソリストとして参加している。オペラでは、ひろしまオペラルネッサンス主催＜プッチーニ『ジャンニ・スキッキ』ズィータ＞、＜ビゼー『カルメン』メルセデス＞で出演。現在、声楽アンサンブル「Voice=Spective」メンバー。その他、各地で演奏活動をしながら後進の指導にあたっている。

横町あゆみ（よこまち　あゆみ）…… アルト（東京）

京都市立芸術大学卒業、金沢大学大学院修了。国立音楽大学音楽研究所にてバロック時代の演奏様式を学ぶ。ルネサンス、バロックから現代に至るまで幅広い作品のソリストを務める。表情のある伸びやかな声には定評があり、特に教会作品のレパートリーは数多い。2012年西東京ニューカマーアーティスト最優秀賞受賞。2016年より古楽アンサンブルグループ「レ・ゾルフェ」として”フレンチカンタータの時代の音楽”と題したコンサートシリーズを展開するなど意欲的に活動している。新国立劇場合唱団、ヘンデル・フェスティバル・ジャパン、ヴォーカルコンソート東京などの声楽アンサンブルに所属するほか、合唱団の指導者、ヴォイストレーナーとして的確な指導にも定評がある。2022年３月にワオンレーベルよりCD「クレランボーの至宝」をリリースし、レコード芸術誌・準推薦盤、音楽現代誌・推薦盤に選出される。東京いのりのとき合唱団指導スタッフ。

眞木喜規（まき よしのり）…… テノール（神戸）

主に教会音楽の分野においてバッハのカンタータ、ミサ曲で数多くのソロを歌い、受難曲の福音史家等で活躍。'02年ライプツィヒ・バッハ音楽祭にソリストとして出演。神戸ルミナリエの会場演出音楽に声楽アンサンブルとして録音に参加。現在、神戸市混声合唱団団員。Voice＝Spectiveディレクター。神戸いのりのとき合唱団合唱指導スタッフの他、日本製鉄合唱団ヴォイストレーナー、室内合唱団えべっさんす、コルス・シンフォニアクス、各指揮者。日本キリスト教団マラナ・タ教会モテットを歌う会、ヴェリタス・コア大阪、アンサンブル・ヴォーチェ等で合唱指導を担当している。

鏡 貴之（かがみ・たかゆき）…… テノール（東京）

岩手大学教育学部卒業。東京芸術大学大学院音楽研究科修士課程修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主にオラトリオ、宗教曲のソリストとして活動中。特にJ.S.バッハの作品では《クリスマス・オラトリオ》《ヨハネ受難曲》《ミサ曲ロ短調》や多数の教会カンタータのソロを務め、活動の中心になっている。2012年第４回東京国際声楽コンクール第１位、並びに審査員特別賞、東京新聞賞受賞。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、日本声楽発声学会、各会員。東京バッハ合唱団ヴォイストレーナー、レクイエム・プロジェクト「東京いのりのとき合唱団」指導メンバー。バッハ・コレギウム・ジャパン、エクス・ノーヴォ、各メンバー。

小藤洋平（ことう・ようへい）…… バス（東京）

国立音楽大学声楽科卒業。尚美ディプロマコース及びハンブルク音楽院修了。声楽を鈴木惇弘、竹内則雄、K. ショホの各氏に師事。第12回友愛ドイツ歌曲コンクール入選。バッハ《マタイ受難曲》やヘンデル《メサイア》等のソリストを多く務める。またルネサンスのアカペラ曲から現代曲の初演まで、アンサンブルにおいても幅広い経験を持ち、コーロ・リベロ・クラシコ、カルテット・プロヴィゾワール、HFJキャノンズ・コンサート室内合唱団等のメンバーとして、様々な演奏会に出演している。レクイエム・プロジェクトには2011年３月より参加。ソリストとして、また合唱メンバーとして国内外各地での公演やCD録音に参加している。

大塚雅仁（おおつか　まさと）…… バス（東京）

群馬県生まれ。千葉大学法経学部法学科、東京藝術大学声楽科を卒業。武蔵野音楽大学別科を修了。声楽を堀内康雄、多田羅迪夫、野本立人、大島博、指揮法を今村能、森垣桂一の各氏に師事。オペラでのバリトンの諸役に加え、モーツァルト、フォーレ、上田 益『レクイエム』ベートーヴェン『第九』『合唱幻想曲』、ヘンデル『メサイア』などのバリトンソロを務める。また、合唱指揮者 栗山文昭氏のもとで、様々な合唱の研鑽を積む。「第２回 若い指揮者のための合唱指揮コンクール」第３位。近年、青山学院大学の「オール青山メサイア」合唱指導を担当。現在、レクイエム・プロジェクト東京いのりのとき合唱団をはじめ、多数の合唱団に指揮・指導者として関わっている。

林 葉子（はやし ようこ）…… ピアノ（神戸）

大阪音楽大学音楽学部卒業、同大学学部専攻科修了。卒業時に関西新人演奏会に出演。ソロリサイタルやジョイントコンサートなどでのソロの他、室内楽や声楽との共演で多数の演奏会に出演。大阪音楽大学教育助手を経て、現在主に歌曲・合唱分野でのピアニストとして活動。梅本俊和、故松浦豊明、益子明美各氏に師事。神戸音楽家協会、ソワレの会各会員。レクイエム・プロジェクト神戸いのりのとき、および佐用いのりのとき合唱団、女声合唱団パラダイスQ、女声合唱団ブォンヌモーレ、西宮フラウエンコール、ハルモニア室内合唱団各ピアニスト。

陶山薫子（すやま かおるこ）…… ピアノ（神戸）

大阪音楽大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻卒業。なにわ藝術祭新進音楽家競演会、若い音楽家たちの飛翔、ピアノデュオ名曲の調べ〈兵庫県舞台芸術団体フェスティバル参加事業〉、サマーミュジックフェスティバル大阪2014等の演奏会に出演。2006年ポーランド国立ショパンアカデミー学院夏期セミナー受講。現在、歌曲や合唱、器楽等の伴奏者として活動。伊藤勝、益子明美の各氏に師事。レクイエム・プロジェクト神戸いのりのとき合唱団、豊中コール花音、スマイルコーラス各ピアニスト。神戸音楽家協会、歌曲研究会「ソワレの会」各会員。

倉片 明（くらかた・さやか）……ピアノ（東京）

国立音楽大学教育音楽科卒業。ピアノを藤原弘江氏 伴奏法を水谷真理子氏に師事。ドイツリートを中心とした歌曲の伴奏をはじめ、オペラ、合唱、バイオリンやフルートなど器楽とのアンサンブルやバレエピアニストなど幅広く活動中。2019年よりレクイエム・プロジェクト東京いのりのとき合唱団ピアニスト。

箭野純子（やの じゅんこ）…… ピアノ（東京）

岩手県盛岡市出身。東京音楽大学ピアノ専攻卒業。これまでに渡部精治、斗ヶ沢敦子、海老原直美、長川晶子の各氏に師事。イタリアにて夏期音楽講習会を受講。盛岡芸術祭、岩手芸術祭、いわぎんスペシャル　ざ・CLASSIC等に出演。現在は後進の指導に当たる他、声楽や合唱の伴奏者として活動をしている。2019年よりレクイエム・プロジェクト東京いのりのとき合唱団ピアニスト。

ゲイル徳子（げいる のりこ）…… ピアノ（長崎）

活水女子短期大学音楽科卒業。同学非常勤講師を経てメルボルン大学音楽科に編入し、同学を卒業。ディプロマを取得。長崎県オペラ協会の歌劇「蝶々夫人」第1回公演のコレペティトールピアノを務めた。作曲家・上田益氏が主宰するレクイエム・プロジェクトの長崎、神戸、ポーランド各公演等、合唱ピアニストとして数多くのコンサートに出演。小六禮次郎作曲「金もくせい」、湯山昭作曲「西海の恋歌」、小林秀雄作曲「水と影」、上田益作曲「生きとし、生けるものへ」「いのりの情景」の各合唱組曲の初演ピアニストを務めた。ピアノを大塚和子、中野章三郎、アレキサンダー・セメツキー、室内楽と伴奏法をマイケル・キーラン・ハーヴェイの各氏に師事。現在、メサイアシングアロング、高田どれみふぁ合唱団、レクイエム・プロジェクト長崎合唱団、女声合唱団JOYピアニスト。

鎌田章子（かまだ　あきこ）…… ピアノ（広島）

見真学園広島音楽高等学校、エリザベト音楽大学ピアノコース卒業。同大学卒業演奏会に伴奏ピアニストとして選出される。ピアノを佐藤冨起子、佐藤恭子各氏に師事。ソルフェージュを佐伯康則氏に師事。広島市の各公民館主催事業や包括支援センター主催講座にてピアノを担当。現在、レクイエム・プロジェクト広島合唱団のほか、複数の合唱団や声楽の伴奏ピアニストとして精力的に活動する他、後進の指導にあたる。

大井里菜（おおい りな）…… ピアノ（広島）

広島県出身。4歳からピアノを始める。エリザベト音楽大学鍵盤楽器専攻卒業、同大学院修了。在学中に特別奨学生に選ばれる。第7回ベーテン音楽コンクールベスト10賞受賞。第16回さくらぴあ新人コンクール第3位受賞。第35回広島市新人演奏会にて優秀演奏者に選ばれ、プロミシングコンサート2014にてラヴェルのピアノ協奏曲ト長調を広島交響楽団と共演。第25回コジマムジカコレギアにてラフマニノフピアノ協奏曲第二番をオーケストラと共演。これまでに滝村理恵、増原みどり、光井安子、戸梶美穂の各氏に師事。

菅原紀子（すがわら のりこ）…… ピアノ（仙台）

栗原市若柳出身。常盤木学園高等学校音楽科、宮城学院女子大学学芸学部音楽科卒業。同大学卒業演奏会に出演。仁科篤子、伊達華子の各氏に師事。第13回大阪国際音楽コンクール2台ピアノ部門エスポアール賞受賞。2016年にはリサイタルを栗原市と仙台市にて開催。2018年には遠野物語・栗原地方のわらべ歌・20世紀初頭のヨーロッパ音楽を題材に、音楽と語りによる演奏会「民話の音色」を企画構成し、遠野、栗原、仙台の3会場で好評を博す。その後も土地に伝わる民話伝承やわらべうたの世界を歩きまわり、2019年には遠野少年少女合唱隊の第30回記念演奏会にて、演奏と共に構成も担当した。また、親子で音楽体験honobono（ほのぼの）を主宰し、0才から参加できる音楽遊びのワークショップを定期的に開催している。現在、こーるなんざい、コーラスわかやなぎ、ローゼンシュタットコール、メサイアを歌う会、レクイエムプロジェクト仙台各ピアニスト。カーザムジカ音楽教室講師。宮城県芸術協会会員。

レクイエム・プロジェクト 神戸いのりのとき合唱団

● 指導者：北爪かおり、栗木充代、眞木喜規　ピアノ：林 葉子、陶山薫子

ソプラノ　木戸登紀子、広井かほる、熊谷厚子、高田裕子、藤岡敏子、近藤朋子、三條エリ子、宍倉正子、平見安佐子、武貞育子
白藤悦子、山崎妙子、八代谷晶子、岸田敬子、中村せい子

アルト　青山真理子、亀井純子、和田神奈子、浅野美佐子、髙田万里、中津智子、宮田瑞江、多田真知子、森 昌子、村上純子
三宅のぶこ、伊藤芳恵、島田幸子、石上浩美

テノール　青山佳弘、藤井一郎、山田達也

バス　牧田憲一、岡本精二

レクイエム・プロジェクト 東京いのりのとき合唱団 有志

● 指導者：本宮廉子、横町あゆみ、鏡 貴之、大塚雅仁　ピアノ：倉片 明、箭野純子

ソプラノ　石井由美子、川崎洋子、仁科由紀恵、高田 薫、寺田千晴、荒舩禎子、伊東淳子、山中知子

アルト　阿部早苗、池田美惠子、小沢節子、中田令子、木村美佐子、米田陽子、高橋 裕

テノール　石田庸介、辻 直浩

バス　伊藤俊介、石井洋一

レクイエム・プロジェクト 佐用いのりのとき合唱団 有志

● 指導者：北爪かおり　ピアノ：林 葉子

ソプラノ　孝本鈴子、横山幸子、梶本とき子、腰前初美、篠原千佳里、花尾智香子、敏蔭純子

アルト　田中やちよ、鎌井弥生、竹内弘美

レクイエム・プロジェクト長崎合唱団 有志

● 指導者：志岐光昭、大岩しのぶ　ピアノ：ゲイル徳子、下条絵里子

ソプラノ　池田成子、島田淑子、高田節子、竹下知子、永野倉代、濱岡まゆみ、前川美由紀、村上安立、山内眞美、山川加津枝

アルト　内山美土里、江添郷子、佐藤寿美子、島 眞美子、松本新子

テノール　片町修一、手島孝治、中元英貴

レクイエム・プロジェクト広島合唱団 有志

● 指導者：佐伯康則　ヴォイストレーナー：大島久美子　ピアノ：鎌田章子、大井里菜

ソプラノ　清老敏子、吉野早百合、花田啓子、戸原侑子

アルト　大島久美子

テノール　吉川 惠

バス　平岡昭洋

レクイエム・プロジェクト仙台合唱団 有志

● 指導者：工藤欣三郎、佐賀慶子　ピアノ：菅原紀子、筒井未友紀

ソプラノ　吉岡恵美、池田紀子、宮城久美子、佐賀慶子、山田和子

アルト　花田美子、菅野尚子、米田典子

テノール　海老誠一

バス　遣水初郎、米田和由

レクイエム・プロジェクト北いわて合唱団 有志

● 指導者：小林友美　ピアノ：廣﨑 恵

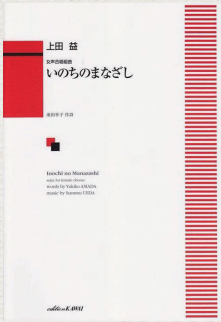
ソプラノ　林﨑洋子、澤口則子、佐々木洋子、速應和子、小林友美

アルト　晴山ヨウ子、川村美代子、谷地久仁子、宮澤由紀子、石崎レイ子

テノール　藤岡龍海、大井正信

「レクイエム・プロジェクト」で生まれた合唱作品とそのCD

主宰者・上田 益が作曲し、出版されている合唱作品は、2023年1月15日現在23冊。
そのうち最初の「いのちのまなざし」以外は「レクイエム・プロジェクト」の活動やそのご縁で生まれた作品です。



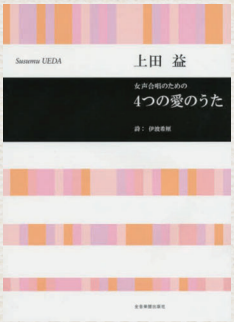
女声合唱組曲
いのちのまなざし

レクイエム
～あの日を、あなたを忘れない～

混声合唱組曲
遥かなる海へ

混声合唱組曲
黙礼

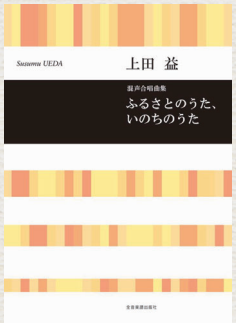
女声合唱組曲
黙礼



女声合唱のための
４つの愛のうた

スターバト・マーテル
悲しみの聖母

児童（女声）合唱組曲
今この時を



混声合唱曲集
ふるさとのうた、いのちのうた

女性（児童）合唱のための
三陸鉄道が行く ～小さな村の物語～

女声合唱組曲
遥かなる海へ

混声合唱組曲
光と木の影に

ミサ・ブレヴィス
～平和への祈り～
アベ・マリア
[混声合唱]

女声合唱組曲
光と木の影に

混声合唱組曲
生きとし、生けるものへ

女声合唱作品集
風のように
～三陸鉄道にのって～

混声合唱組曲
名もなきところへ

女性合唱組曲
こころのアルバム

ラテン語による混声合唱組曲
いのりのとき

混声合唱組曲
風の旅路

女性合唱のための
草原二題

混声合唱組曲
また逢える
～いのちの日々かさねて～

女性合唱組曲
いのりの情景

発売中のCD

REQUIEM
（プラハ録音）

混声合唱組曲
黙礼
遥かなる海へ

女声合唱作品集
４つの愛のうた
いのちのまなざし
黙礼

混声合唱組曲
生きとし、生けるものへ
黙礼
また逢える

＜東京2021特別公演ライブ録音＞

各CDはAmazon、パナムジカで取り扱い。（東京2021特別公演ライブ録音盤は、パナムジカのみ）

これまでの主催および関連コンサート

（合唱団主催の定期演奏会などは除く）

2009

2010

2010

2011

東日本大震災緊急チャリティーコンサート

佐用：2011.03.19 さよう文化情報センター

神戸：2011.03.25 松方ホール

2011

2011

2011

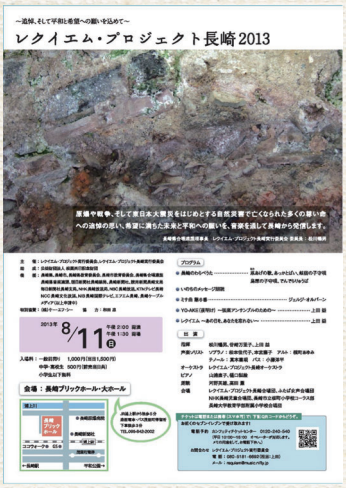
2011

2012

2012

2012

2013



2013

2013

2013

2013

2014

2014

2014

2014

2014

2014

2014

2014

2014

2015

2015

2015

2015

2015

2015

2015

2014

2014

2015

2016

2016

2016

2016

2016

2017

2017

2017

2017

2018

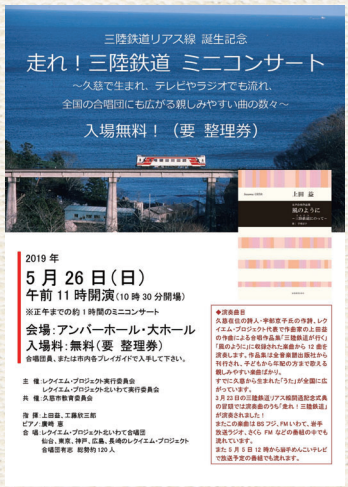
2018

2018

2018

2018

2019



2019

2019

2017

2018

2018

2018

2018

2018

2019

2021

2021

2021

2021

2022

2022

2022

2022

2022

2022

2022

プロジェクトを応援していただいている自治体・団体

助成いただいた財団など

●公益財団法人ひょうご震災記念21世紀機構　●ひょうご安全の日推進県民会議　●(公財)関西・大阪21世紀協会　●(公財)宮城県文化振興財団　●仙台市市民文化事業団　●(財)朝日新聞文化財団　●(財)三菱UFJ信託地域文化財団　●(公財)大阪コミュニティ財団　●(財)アサヒビール芸術文化財団　●JR西日本あんしん社会財団　●私的録音補償金管理協会　●(公財)エネルギア文化・スポーツ財団　●(公財)松園尚巳記念財団　●(公財)十八銀行社会開発振興基金　●宮城県文化芸術の力による心の復興支援事業助成　●千代田区文化事業助成　●文化庁 ARTS for the future!(コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援)

ご後援いただいた自治体、新聞社、放送局など

●東京都　●兵庫県　●沖縄県　●長崎県　●広島県　●宮城県　●福島県　●神戸市　●長崎市　●広島市　●仙台市　●南相馬市　●札幌市　●五島市　●佐用町　●兵庫県教育委員会　●長崎県教育委員会　●広島県教育委員会　●神戸市教育委員会　●那覇市教育委員会　●浦添市教育委員会　●長崎市教育委員会　●五島市教育委員会　●広島市教育委員会　●南相馬市教育委員会　●佐用町教育委員会　●久慈市教育委員会　●洋野町教育委員会　●野田村教育委員会　●普代村教育委員会　●葛巻町教育委員会　●札幌市教育委員会　●朝日新聞　●読売新聞　●神戸新聞　●沖縄タイムス　●琉球新報　●河北新報社　●中国新聞社　●福島民報社　●福島民友新聞社　●岩手日報社　●デーリー東北新聞社　●北海道新聞社　●NHK神戸放送局　●NHK沖縄放送局　●NHK長崎放送局　●NHK 広島放送局　●NHK仙台放送局　●NHK福島放送局　●NHK盛岡放送局　●毎日放送　●朝日放送　●関西テレビ　●読売テレビ　●琉球放送　●琉球朝日放送　●沖縄テレビ　●長崎放送　●テレビ長崎　●長崎文化放送　●長崎国際テレビ　●中国放送　●広島テレビ　●広島ホームテレビ　●テレビ新広島　●東北放送　●東日本放送　●ミヤギテレビ　●仙台放送　●福島中央テレビ　●福島放送　●テレビユー福島　●福島テレビ　●サンテレビジョン　●長崎ケーブルメディア　●ニッポン放送　●ラジオ関西　●ラジオ沖縄　●エフエム沖縄　●エフエム長崎　●広島エフエム　●(財)神戸新聞文化財団　●(財)対馬丸記念会　●中華人民共和国大阪総領事館　●駐神戸大韓民国総領事館　●タイ王国大阪総領事館　●駐日トルコ共和国大使館　●在大阪イタリア総領事館　●在大阪インドネシア総領事館　●日本中国文化交流協会　●在チェコ日本国大使館　●三陸鉄道(株)　●(公財)音楽の力による復興センター東北　●九州商船(株)　●エフエム岩手　●ダナス・プランニング　●全音楽譜出版社　●カワイ出版　ほか

ご協賛いただいた企業、自治体、財団

特別協賛　●(株)ケー・エフ・シー　※2010年より毎年

自治体協賛 ●長崎市(被爆70周年および75周年事業)

協　　賛　●三菱東京UFJ銀行　●全日本空輸(株)　●(株)日立製作所　●(財)沖縄美ら島財団　●さんちか　●(株)伊丹産業　●伊丹シティホテル　●(株)関西スーパーマーケット　●日本エスリード(株)　●日東物産　●敷島製パン労働組合神戸支部　●敷島製パン労働組合神戸冷食支部　●(有)平中鉄工所　●(株)アイビーオフィス　●(株)河戸製作所　●(有)協立技工　●(株)ケー・エフ・シー マスディック　●(株)コマックス　●(株)三友ファスニング、サンライズ工業(株)　●(株)タアッド　●(株)中外精工　●日本管工(株)　●(株)羽根産業社、富士テクノ(株)　●(株)村井製作所　●(有)ロードファスニング　●敷島製パン労働組合神戸支部　●敷島製パン労働組合神戸冷食支部　●ホクセツゴム(株)　●生島機工(株)　●医療法人社団十善会 野瀬病院　●北リアス病院　●(株)丸才　●宮城建設(株)　ほか

活動を記事掲載していただいた新聞社、出版社

●朝日新聞　●読売新聞　●毎日新聞　●産経新聞　●日本経済新聞　●神戸新聞　●長崎新聞　●河北新報　●沖縄タイムス　●琉球新報　●福島民報社　●福島民友新聞　●岩手日報　●デーリー東北　●西日本新聞　●中国新聞　●音楽之友社

活動をニュースや特集などで放送していただいたテレビ局、ラジオ局

●NHK神戸放送局　●NHK長崎放送局　●NHK仙台放送局　●NHK沖縄放送局　●ミヤギテレビ　●毎日放送　●朝日放送　●長崎放送　●テレビ長崎　●長崎文化放送　●長崎国際テレビ　●サンテレビジョン　●ラジオ関西　●NBCラジオ　●CAT-V 仙台ケーブルテレビ　●長崎ケーブルメディア

阪神・淡路大震災をきっかけに、
ひとりの作曲家の13年間に及ぶ苦悩の時を経て始ったこのプロジェクトは、
神戸から始まり、これまで全国10箇所で活動が行われ、
現在でも継続的にその内の7つの地域で実施されています。
いずれも自然災害や戦災で傷ついた地域です。

LONG INTERVIEW

レクイエム・プロジェクト 10年の歩みと、コロナ禍を含むその後の5年

そしてプロジェクトを通して作曲した合唱作品のすべては
全音楽譜出版社やカワイ出版から合唱組曲
あるいは合唱作品集として出版されています。
けれどもここに至るまでの道は決して平坦ではありませんでした。

インタビュー風景（2018年）

このインタビューは、2018年に開催された活動10周年のコンサート時に、プログラムに記事として掲載するために行われました。聞き手は当時の神戸の合唱団員で編集委員でも あった渡部猛さんです。活動15周年を迎えるにあたり、もう一度このプロジェクトのこと を知っていただきたく、加筆・再構成を行い、再度掲載します。

レクイエム・プロジェクト 28年の軌跡 ● プロローグ

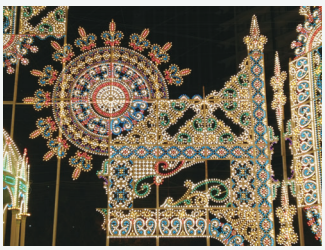
レクイエム・プロジェクトは活動15周年。しかしプロジェクトが始まるまでに
1995年1月17日から13年間というとても長く大切なプロローグともいうべきプロセスがある。
実際にはその期間も含めた28年に及ぶ軌跡が存在している。（上田 益）

1995.1.17 阪神・淡路大震災 発生

大阪に生まれ、関西を拠点に活動していた上田益。神戸は学生時代から大好きな街であり、憧れの街でもあった。ところが震災の前年秋、仕事の拠点を関西から東京に移していた上田は、1週間前には神戸の街にいたのに、テレビから流れてくる惨状を傍観者のように見ているしかない状況の中で、「自分だけ難を逃れた」ような後ろめたい気持ちに苛まれた。

「自分が携わる音楽、特に作曲という仕事が、こんな時に何の役に立つのか。何ができるのか」という命題を突きつけられた大きな出来事だった。悶々としながらも、まずは自分の足元を固め、拠点を東京に移した結果を出していかなければ本末転倒であることは明白だったが、突きつけられた命題を解くための糸口を探す日々が続いた。

1999.夏 神戸ルミナリエ・会場音楽作曲の依頼を受け、以後21年間作曲を続ける



震災から4年半が経過した1999年夏、かねてから仕事でご縁のあった三井康嗣さんから「神戸ルミナリエという光のイベントが震災の年から始まっていて、今年から私が会場演出音楽の制作担当をすることになったので、是非作曲をお願いしたい」という電話をいただいた。これこそが 私の命題を解く糸口となり、そしてライフワークの一つになると直感した。

それが全ての始まりだった。
逆に言えば、神戸ルミナリエの会場音楽を担当していなければ、おそらくレクイエム・プロジェクトも存在しなかっただろう。そしてその時はまだ、全国各地の多くの人たちと巡り合うことになるとは、思ってもいなかった。

上田益が1999年からコロナ禍で中断される2020年の前年まで、21年にわたり毎年作曲してきた楽曲は約130曲。震災の犠牲となった方々への追悼の思いを込め、残された被災者の方々の未来が希望に満ち溢れることを切に願いながら毎年作曲。

その楽曲に込める思いは、レクイエム・プロジェクトへと引き継がれていく。

2005.1.17 震災から10年、神戸ルミナリエの楽曲による追悼コンサート「いのりのとき」を開始。

震災から10年経ったら、各方面からの支援はどう変化するのだろう。神戸ルミナリエの会場音楽作曲を続けながら、そう思っていた。「10年ひと昔」という区切りの意識は昔から日本人にあり、やはり10年を境にして支援は減り、記憶も風化していくことは避けられないように感じていた。そんな中にあって自分はどうするのか。それは必然的に固まりつつあった。

スポーツイベント「アジア競技大会広島1994」の開会式・閉会式の作曲スタッフの一人として仕事をしたことをきっかけに、震災前年秋に38歳というある意味タイミングとしては遅い年齢で仕事の拠点を東京に移した上田。長野冬季オリンピックの公式楽曲も1998年には手がけていたものの、自ら営業しながらの人脈作りは大変だった。
いわゆる商業音楽の世界で結果を出している実感が得られたのはNHKみんなのうた「ぶたまんごころ（歌：小林亜星）」で作曲・編曲を担当した2002年頃からだろうか。初の連ドラの音楽担当は、月9と呼ばれる枠の「東京ラブ・シネマ（主演：江口洋介、財前直見）」<2003年>。話題作の連ドラ「黒革の手帖（主演：米倉涼子）」<2004年>、「1リットルの涙（主演：沢尻エリカ）」<2005年>の音楽も担当したほか、レコード会社の様々なCDの商品企画に携わり、プロデュース・作曲・編曲を手掛けていた。アニメ、単発ドラマやTV番組テーマなど仕事は多岐におよび、次第に多忙を極めるようになる。

そんな状況の中でも神戸の震災への思い、神戸ルミナリエへ会場音楽への思いは揺らぐことなく、震災から10年を経過した2005年1月17日に第1回追悼コンサート「いのりのとき」を開催。神戸ルミナリエの楽曲を、レコーディングメンバーの声楽家や演奏家が生演奏し、1月17日の思いを被災者の方々と共有した。会場はレコーディングも行っていた神戸松蔭女子大学チャペル。この日のコンサートの最後に、上田は来場者の皆さん（大半が被災者）に約束した。

「この無料の追悼コンサートを、最低10年は続けることを約束します」

そして毎年予定通り追悼コンサートを続け、第4回が終了した2008年1月。継続開催が危ぶまれる事態となる。
会場としてお借りしていたチャペルがある神戸松蔭女子大学が、2009年から大学入試センター試験の会場になることが決まり、代わりのコンサート会場を急いで探す必要が生じたのだ。

2008年2月　レクイエム・プロジェクトが始まる。

代わりのコンサート会場を急いで探すと言っても、通常は1年前にコンサートホールの抽選が終わるため、2009年1月17日に開催するためには、教会などをお借りするしか方法がない。しかしなかなか適当な会場が見つからない。神戸ルミナリエの会場音楽の作曲を依頼してくれ、毎年追悼コンサートの裏方もやってくれていた三井さんにも相談し、彼の繋がりで兵庫県立美術館の空いている展示スペースをお借りできることになる。

被災者の方々を中心とした合唱団を組織し、作曲したオリジナルのレクイエムをその合唱団により初演する構想は、追悼コンサート「いのりのとき」を始めた頃からあったが、震災から20年となる2015年に向けて、2013年ごろから始めるはずだった。しかしそれを前倒しすることにした。具体的な内容や進め方、コンセプトなどを考えはじめたのが2008年2月。レクイエム・プロジェクトのスタートとなった。ただ神戸に関していえば、2005年の追悼コンサートに来て下さったご来場者との約束を果たすため、2014年までのコンサートは無料の「追悼コンサートいのりのとき」としての開催だった。

2008年6月に被災者中心の合唱団メンバーの公募を始め、練習がスタートしたのは同年7月5日。レクイエムの完成初演は、阪神・淡路大震災から15年を迎える2010年1月17日。100人を超える大合唱団が、オーケストラとともに演奏した。多くが被災者の人たちだった2,000人の聴衆の心をわしづかみにする演奏だったと思う。

そして2010年以降、自然災害や戦争で傷ついた地域に、この活動が広がることになる。

それは上田自らが各地に出向き、レクイエム・プロジェクトの趣旨に賛同してくださる指導者や中核となって動いて下さる人たちを探し、そして直接会って話をして理解していただくより他に方法が無い、とてつもなく時間と労力を必要とする長い旅の始まりでもあった。

レクイエム・プロジェクト
公式ホームページ

以下、これまでの活動地域をご覧いただいた後に、2018年当時のインタビューへと続く

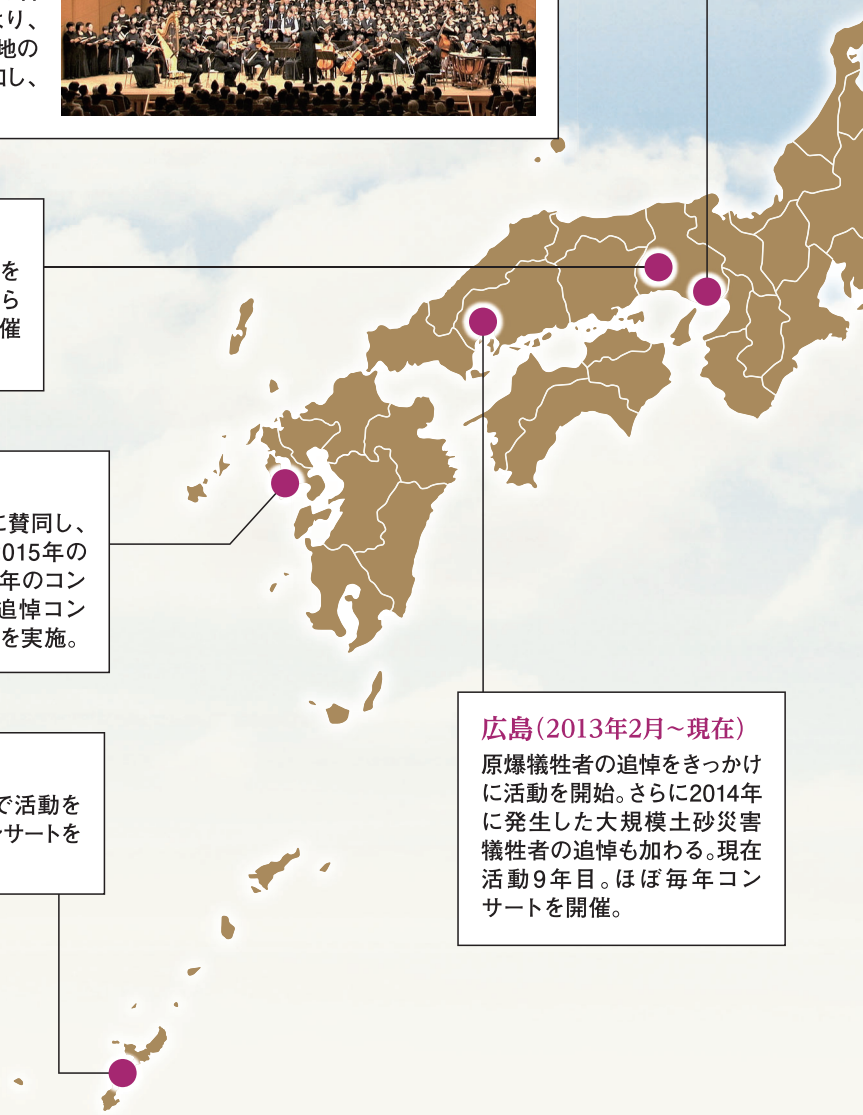
レクイエム・プロジェクトとは

作曲家・上田益(うえだすすむ)が主宰する「レクイエム・プロジェクト」は、人と人、地域と地域をつなぐ合唱プロジェクトとして、阪神・淡路大震災の被災地である神戸で2008年に始まりました。これまで全国10箇所で活動し、現在、北いわて(久慈、野田村など)、仙台、東京、神戸、兵庫県佐用町、広島、長崎といった自然災害や戦災で傷ついた7地域で継続した活動を行っているほか、海外公演(プラハ、ウィーン、バチカン、イタリア、ポーランド)も行っています。

https://www.requiem-project.com

レクイエム・プロジェクト
公式ホームページ

現在までのプロジェクト実施地域、関連活動地域



神戸(2008年2月～現在)

レクイエム・プロジェクト発足の地。阪神・淡路大震災犠牲者の追悼をきっかけに2008年2月から準備活動が始まり、7月から合唱団の練習を開始。現在、活動14年目。2016年までは毎年震災の日である1月17日にコンサートを実施。2017年より、他地域の団員が参加しやすい日程で開催。各地のプロジェクト・コンサートに毎回有志が多く参加し、活動の中心的存在。毎年コンサートを開催。

兵庫県佐用町(2010年11月～現在)

2009年に発生した水害犠牲者の追悼をきっかけに活動を開始。現在活動11年目。各活動地域の中で混声合唱団から唯一の女声合唱団に昨年変更。数年に1回コンサートを開催するほか、積極的に合唱団としての定期演奏会を行う。

長崎(2012年9月～現在)

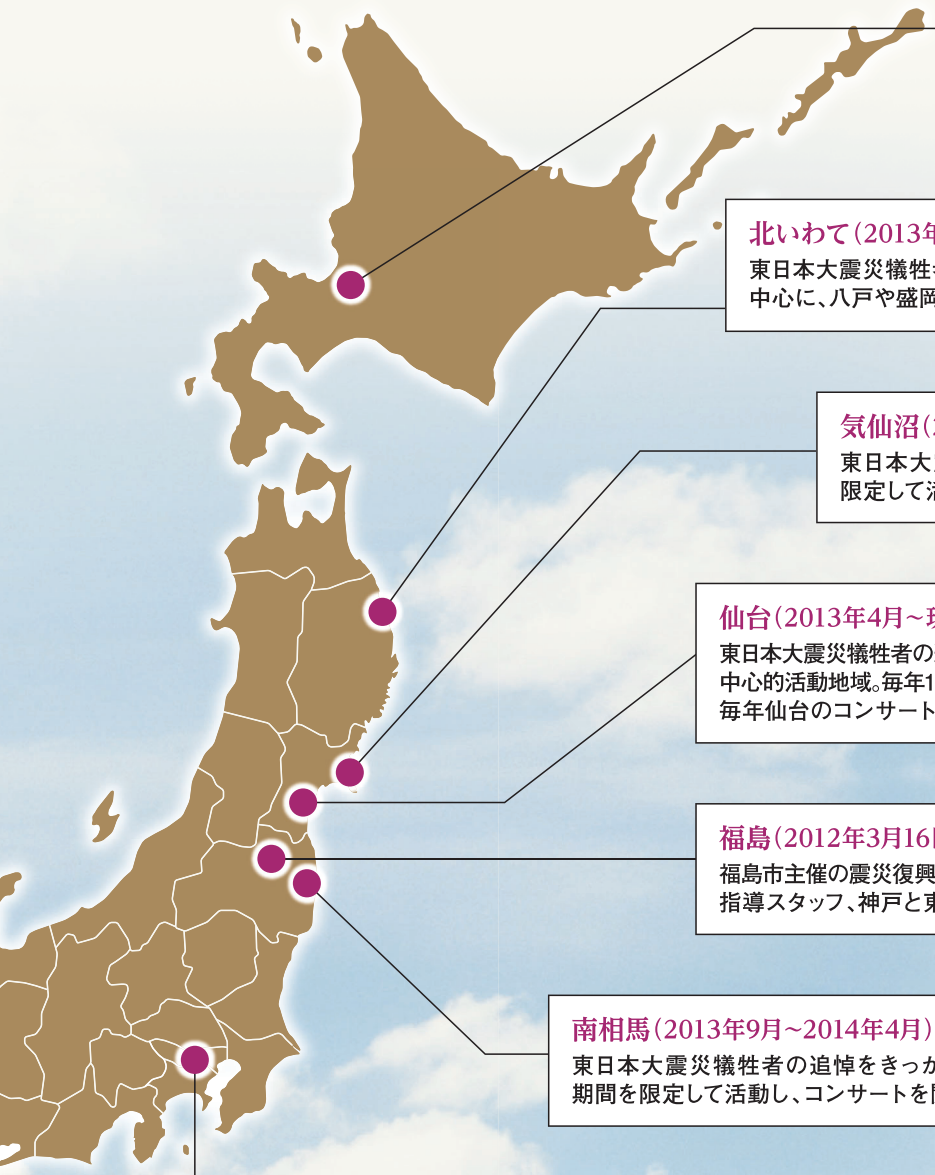
原爆犠牲者の追悼をきっかけに活動を開始。趣旨に賛同し、公募により集まった合唱団員数は全国でも有数。2015年のコンサートは長崎市被爆70周年記念事業に、2020年のコンサートは同75年記念事業に採択。浦上天主堂で追悼コンサートを開催。現在活動9年目。ほぼ毎年コンサートを実施。

沖縄(2010年4月～2015年6月)

沖縄戦の犠牲者追悼をきっかけに那覇で活動を開始。2015年の沖縄戦終結70年の追悼コンサートをもって5年間の活動を終了。

広島(2013年2月～現在)

原爆犠牲者の追悼をきっかけに活動を開始。さらに2014年に発生した大規模土砂災害犠牲者の追悼も加わる。現在活動9年目。ほぼ毎年コンサートを開催。



札幌（2012年3月11日）
東日本大震災チャリティーコンサート実施。神戸と東京の団員有志が参加。

北いわて（2013年11月～現在）
東日本大震災犠牲者の追悼をきっかけに活動を開始。久慈、野田村を中心に、八戸や盛岡を含む周辺地域からも参加。現在活動8年目。

気仙沼（2015年4月～8月）
東日本大震災犠牲者の追悼をきっかけに期間を限定して活動し、コンサートを開催。

仙台（2013年4月～現在）
東日本大震災犠牲者の追悼をきっかけに活動を開始。東日本大震災被災地の中心的活動地域。毎年1回、コンサートを開催。大船渡や陸前高田の人たちも、毎年仙台のコンサートに参加している。現在活動9年目。

福島（2012年3月16日）
福島市主催の震災復興コンサートに、和合亮一氏との対談や合唱で上田益、指導スタッフ、神戸と東京の合唱団有志が出演。

南相馬（2013年9月～2014年4月）
東日本大震災犠牲者の追悼をきっかけに期間を限定して活動し、コンサートを開催。

東京（2010年4月～現在）
神戸についで全国2番目の実施地域。各地のプロジェクト・コンサートに毎回有志が多く参加し、神戸とともに活動の中心的存在。東京大空襲、関東大震災などの災害を活動根拠としている。数年に1回コンサートを開催するほか、不定期に合唱団としての定期演奏会を行う。現在活動12年目。

＜海外での活動＞

- プラハ（チェコ）：2012年4月1日、東日本大震災チャリティーコンサートをドヴォルザーク・ホールでプラハ・フィルと開催。日本から神戸・東京の声楽ソリスト5人と合唱団有志17人が参加。在チェコ日本国大使館後援。
- ウィーン（オーストリア）：2014年10月11日、聖シュテファン大聖堂主催公式コンサート開催。東日本大震災から3年を迎え、その追悼の思いを込め、神戸・東京の声楽ソリスト（指導者）8人、仙台、南相馬、東京、神戸、広島、長崎から参加したプロジェクト合唱団有志、そして仙台フィルメンバー4人を含む総勢158人と現地のプロ・オーケストラにより演奏。
- 復興祈念と平和への祈りを込め、バチカン教皇庁の特別な許可を得て、「バチカン・イタリア特別公演」を2016年9月に実施。サン・ピエトロ大聖堂ミサでの演奏、システィーナ礼拝堂での献唱（以上バチカン）、聖フランチェスコ聖堂（アッシジ）、サンタ・トリニータ教会（フィレンツェ）での演奏会を行う。声楽ソリスト4人と各地のプロジェクト合唱団有志、総勢106人により演奏。聖フランチェスコ聖堂で初演した、プロジェクト主宰者・上田益作曲「ミサ・ブレヴィス～平安への祈り」は、初演に先立ち教皇フランシスコに献呈する栄誉をバチカン教皇庁から与えられた。
- 「レクイエム・プロジェクトinポーランド～平和への祈り～」を、クラコフ市特別名誉賛助後援、在ポーランド日本国大使館後援のもと、2019年10月に実施。滅多に演奏の機会を持てないシフィドニツァ・平和教会でのオルガンとのコンサート、クラコフ聖マリア教会での献唱、聖カタリーナ教会でのクラコフ・フィルハーモニー管弦楽団との共演、ワルシャワでは聖十字架教会ミサでの演奏や、ワルシャワ大学日本学科設立100周年記念行事の一環としてコンサートを実施。

1. プロジェクト創設の発端と始動

Q（渡辺）：レクイエム・プロジェクトの活動が始まって10周年です。このプロジェクトがどんないきさつで始まり、全体像がどうなっているのか、文章だけでは中々理解していただくのは難しいかもしれません。今日は、インタビューという形で、少しでも活動を知っていただきたいと思っています。まず初めに、活動のきっかけとなった阪神・淡路大震災の時は、どうされていたかということから聞かせてください。

A（上田）：関西出身の私は震災のあった前年の秋、東京に仕事の拠点を移していました。ですので、あの震災を知ったのはテレビの画面を通してです。見慣れたビルが倒壊している。空襲を受けたように街が破壊され、炎上もしている。ついこの間、仕事で神戸にいたのに、今はただ傍観者のようにその様子を見ている。自分だけ難を逃れたようなうしろめたさと、無力感に打ちひしがれていました。

Q：それからの日々は、どんな感じでしたか？

A：こんな事態を前にして音楽に力はあるのか？　作曲家としての自分にいったい何ができるのか？　それが、阪神・淡路大震災が私に突き付けた命題だと思いながら毎日を過ごしていました。テレビから流れてくる犠牲者の方々の情報や、次第に明らかになる被害状況を見ながら悶々とする毎日でしたが、東京での仕事をまずきちんと確立しないと生活できないので必死でしたし、簡単に解決できる命題ではないので、時間がかかりました。

Q：そんな時間経過の中で、ルミナリエの仕事と出会われたわけですね？

A：はい。震災前から仕事で付き合いのあった（株）ジーベックの三井康嗣（みいこうじ）さんから、「今度ルミナリエの音楽制作の担当者になるのですが、是非一緒にやりませんか？作曲してくれませんか？」と、電話をいただいたのです。震災から4年が経った1999年、私が43歳の時です。（株）ジーベックは神戸市内のポートアイランドに会社やスタジオがあり、会社も当然ながら被災していました。

Q：その仕事は、鎮魂と神戸の復興を願うシンボルとなった光の芸術・ルミナリエで、点灯や消灯、そして光の回廊を歩いているとき聞こえてくるあの会場音楽を作曲するという内容のものですね。その時、どんな気持ちでしたか？ そして実際に始められて、どんなことを考えていましたか？

A：この仕事こそ震災から突き付けられた命題を解くきっかけとなり、自分のライフワークになると直感しました。そして仕事が始まってからはルミナリエの音楽に真摯に向き合うことだけを考え、毎年ただひたすらに、震災で亡くなった方々、被災された方々、大切な人を失った方々、復興に力の限りを尽くしている方々などへの思いをこめて、試行錯誤しながら作曲していました。

Q：ルミナリエの音楽では、何がテーマでしたか？ 当初からレクイエム・プロジェクトの構想があったのでしょうか？

A：ルミナリエは毎年テーマがありますが、根底にあるものは「追悼と神戸の街の復興」でした。音楽のテーマは、そのことを踏まえたうえで、「追悼と、未来への希望や夢」ということで当初から現在まで一貫しています。ですが、レクイエム・プロジェクトの構想は、まだ生まれていませんでした。

Q：震災から10年が経った2005年1月17日、ルミナリエの音楽を演奏されていた声楽家や演奏家の協力を得て、無料の『追悼コンサートいのりのとき～あの日を、あなたを忘れない～』を自主企画し開催されます。震災後10年ということに“こだわり”があったのでしょうか？

A：コンサート名の中にも私の『レクイエム』の題名の中にも、《～あの日を、あなたを忘れない～》という文言を入れています。震災後10年を機に始めた理由は、こだわりというよりも、その年を境にきっと追悼のコンサートや行事も少なくなり、記憶が次第に風化していくのではという危惧の念を抱いていたからです。そして始めるからには、10年は必ず続けると自分の中で覚悟を決めて、最初のコンサートにご来場いただいた被災者の方々の前で「最低10年は続けます」と宣言しました。

Q：その追悼コンサートがレクイエム・プロジェクトの直接のきっかけになっていくわけですね？

A：そうですね。ルミナリエの音楽作曲を続けていく中で、自分の作曲家としての存在意義というか、何を創作の根底に置くかということに関して、少しずつですが、自分は楽曲に「いのち」への思いを吹き込むことが役目だと確信していきました。さらに追悼コンサートを続けながら、震災後20年の節目となる2015年に向けて『レクイエム』を作曲し、その時に被災者の方々を中心とした市民合唱団を結成したいと考えるようになりました。つまりプロジェクトを始めるための糸口が、自分の中で芽吹いていったと思います。

Q：ということはプロジェクトの微かな芽吹きはあったけれど、実際に始まるのは当初の予定ではまだ先のことだったのですね?

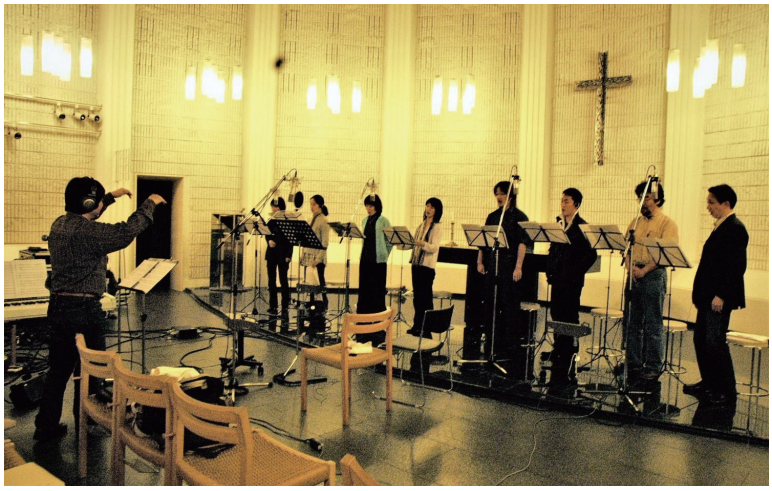
A：当初は2013年頃のスタートを考えていました。ところが2008年の第4回追悼コンサートを終えた数日後に、会場として毎年使わせていただいていた神戸松蔭女子学院大学のチャペルが、翌年から2年間は使えないということが判明したのです。コンサートの日程は、毎年震災のあった1月17日にと決めていました。2009年から2年間は土日開催になり、よりたくさんの皆さんに聴いていただけると思っていたのですが、大学がセンター試験の会場になるため、チャペルも使用できなくなったのです。まだ名称はありませんでしたが、その時「レクイエム・プロジェクト」が私の中で始まったと言えます。翌年のホールの抽選はすでに終わっていたので、正直なところ困った状況でもありました。

Q：会場が決まらない状況を、どうされたのですか?

A：ルミナリエや追悼コンサートで演奏していただいていた声楽家の緋田ご夫妻が協力して下さり、使えそうな教会や会場を探したり、一緒に見に行ったりしてくれました。その時点ではまだ会場は決まらなかったのですが、本当に有難かったですね。今となっては懐かしい思い出です。そして会場を探している時間経過の中で、ふと「震災から15年となる2010年に向けて、レクイエムの作曲を前倒ししよう」という考えが、自然に沸き起こってきました。そして会場も、ジーベックの三井さんが県立美術館に交渉してくれ、翌年のコンサートにも目途が立ったのです。

Q：『レクイエムの初演』の目標が、震災後20年ではなく15年となりました。かなりタイトな日程だったと思いますが、どのように具体化していきましたか?

A：2010年1月17日まで2年を切っていました。ルミナリエの音楽を作曲していたからと言って、レクイエムがすぐに書けるわけではありません。レクイエムを作曲するための心の準備も必要でした。それと並行して活動のコンセプトなどを具体的に考え始め、2月から始めていた準備が一応整ったのが2008年5月だったと思います。その準備の中で、「レクイエム・プロジェクト」という名称も生まれ、6月から合唱団員の募集を開始しました。



最初は応募者が少なく、このままなら自分も合唱団員として舞台に立たなければいけないなと思いました。しかし新聞2紙が記事として取り上げてくれたことで、6月末には65名の団員が集まり、後に『神戸いのりのとき合唱団』となるプロジェクト合唱団の活動が7月から予定通りスタートできました。

Q：合唱団の活動は2008年の7月からですが、実際に準備を始めたのが2月ということで、2018年の1月で丸10周年ということなのですね。コンセプトを考えていく中で、レクイエム・プロジェクトの趣旨をどうすることに決めたのですか?

A：当初の趣旨は、「阪神・淡路大震災の犠牲となった方々の追悼」、そして「大切ないのち、生かされたいのちへの思い」を、「被災者自らが歌に託し伝える」ための合唱プロジェクトということです。

Q：どんな方が当初参加されていたのですか?

A：当初は神戸市内の被災者の方々がほとんどで、近隣から少し参加されていました。お1人だけ、兵庫県北部の豊岡から参加された方がいらっしゃいましたが、さすがに月2回練習に通うには遠すぎるということで、数か月で断念されました。また合唱経験がある人もいましたが、7割近い人たちは本格的な合唱は未経験で、発声も当然習ったことが無い、ましてや楽譜は学生の頃に音楽の授業で見た程度というメンバーが中心でした。

震災の年に生まれた中学1年生から80歳代の方まで幅広い世代と、親子や夫婦での参加、そして東京でも2人の方が私の指導を受けながら遠隔地から参加するという、ある意味現在のプロジェクトの姿を象徴するような人たちの集まりとなりました。

Q：そういったメンバーのために「レクイエム」を作曲されたわけですね。かなり大変な作業だと思いますが、どういうアプローチで取り組まれたのですか?

A：最初に考えたことは、どういった内容にするのか、何語なのかということです。キリスト教文化と密接に結びついた所謂クラシック音楽の世界での「レクイエム」で良いのかという問

題もあります。テキストもラテン語、ドイツ語などと、自国の言語などが考えられ、また独自のレクイエム的な意味合いを持つ楽曲なども、可能性としてあります。ただ日本語の場合は、レクイエム的な内容に相応しい詩を探したり、詩人に書き下ろしてもらったりする必要があります。

Q：確かに日本語は合唱未経験者にとっては取り組みやすいと思いますが、表現が生々しくなり、場合によっては歌えなくなるようにも思えますね。それでラテン語を選ばれたわけですか？

A：日本語の場合、被災者の人たちにとっては、きっと辛いものになるだろうと思っていました。ルミナリエでも、楽曲のテキストを決める際にラテン語を選んだわけです。理由は、あの光の芸術が教会を彷彿とさせるものであったことと、日本語で追悼の楽曲が流れても、生々しすぎると考えたからです。ましてや被災者の人たちが歌うとなると、やはり日本語の選択肢は自然に無くなりました。

その一方、ラテン語は不思議な言語です。宗教曲といわれる楽曲を演奏している人にとっては、ごく日常的なものだと思いますが、クラシック音楽の中では今もなお生き生きと息づいているにも関わらず、キリスト教の教会で使用されることがある以外は、日常では死語となって久しい言語なのです。私のなかでは時間と空間、つまり時代や国や地域を飛び越えてしまう言語のようなイメージでした。

Q：なるほど、そうなのですね。しかしラテン語を使うとなると合唱経験の無い日本人にとっては難しいというか、身近ではなくなる可能性もあるように思います。

A：そのことも可能性としてはあります。ただもうひとつは、神戸の惨禍をより広く海外でも知ってほしい、いつかは海外の人たちにも歌ったり聴いたりして欲しいと考えていました。理由は、海外にも自然災害の被災地が数多くあるからです。そしてヨーロッパに限らず、アメリカ大陸でも、アジアでも、そして今ではアフリカでも、西洋クラシック音楽と呼ばれるものを文化や生活の中に受け入れている国がいくつもあり、ラテン語の宗教曲を聴いたり演奏したりする機会もきっとあるはずです。

私の結論としては、ラテン語のレクイエムの形を借り、典礼文と呼ばれるミサで使用されるテキストを素材にしながら、オリジナルの日本語詩をラテン語に訳して加え、作曲することにしたのです。同じようなコンセプトで、ポーランドの作曲家もレクイエムを作曲していることを後で知りました。

Q：いろいろ検討されて、ラテン語のテキストによるレクイエムの形を借りながら作曲されることに決めた後、神戸の合唱団の練習までに全曲完成していたのですか？

A：いえいえ、ラテン語のテキストでルミナリエのために作曲した別の拙作を２曲ほど用意して、まず練習を始めました。被災者でもある団員の思いを私自身がきちんと受け止めることから始めないと、このプロジェクトの中核を担うことになるレクイエムは書けないと思っていました。当初は月に２回の練習でしたが、その中で毎回数名ずつ自己紹介をしていただき、負担にならない程度に震災当時の体験や気持ちを話してもらうことにしたのです。団員同士も殆ど面識がありませんでしたので、私だけではなく団員の皆さんにとっても意味があったと思います。

Q：団員の自己紹介を聞きながら、いろいろ感じられたと思いますが、特に印象的だったことはありましたか？

A：私自身とても大切なことにたくさん気づかされました。特に印象的だったのは、被災の度合いの違いから生じる微妙な被災者間の温度差です。「私よりもっと悲しい人がいるから、私の悲しみなど表に出せない」「自分だけが怪我もせずに生きていて申し訳ない」「私の家は何も被害が無く、給水車が来ても、食料の配給があっても、申し訳なくてもらいに行くことができなかった」など、被害が少なかった人が≪申し訳ない≫という感情に苛まれていることが重く、印象的でした。震災から13年が経過していましたが、それでもなお誰もが心のうちに様々な苦しみや悲しみを抱えて生きていることがよくわかりました。

Q：そのことは、当初プロジェクトの構想を練っていた時のコンセプトにも何か変化をもたらしましたか？

A：変化というよりも、よりはっきりと見えてきた部分がありました。それは、たとえ経験が無くても、合唱団員としてプロジェクトに関わることで、自分にとっての「歌う意味」を見つけ、それぞれの思いを音楽に込め、詩や曲に込められた思いを伝える「表現者」「メッセンジャー」になれるはずだということです。とても難しい事のように感じるかもしれませんが、「表現者」であることはプロの演奏家や、コンクールで入賞する上手なアマチュア合唱団だけに与えられた専有物ではないと思っています。その人たちに負けずとも劣らぬ表現する理由、歌う理由を持っていることに、少しでも気づいて欲しいと思うようになりました。

Q：それをどのようにレクイエムに反映されようとしたのですか？

A：それらのことを踏まえて、私が作曲をしようとしているレクイエムは、犠牲となった方々の追悼と同時に、生かされた人たちが少しでも苦悩から解放され、前に向かって進んでいくきっかけになるものでありたいと思うと同時に、それが被災者の方々の思いを私なりに反映させることでもあると

思いました。さらに誤解を恐れずに言うなら、作曲家＝表現者としての私の『個』を前面に出すのではなく、奇をてらわず、私自身が被災者の思いを楽曲に込める代理人のような存在でありたいと強く感じたのです。そうなることで、歌う人たちにとって「表現」することの糸口、「歌う意味」を考える糸口になる楽曲が作曲できればと思いました。

Q：ある意味ハードルが高いようにも思いますが、自分にとっての「歌うことの意味」を見つけ、「表現者」を目指すことは、このプロジェクトに関わっていく中で、私も次第に意識するようになってきたと思います。もちろんすぐに出来ることではないので、まだまだわからないこと、出来ないことだらけですが、意識することはとても大切ですね。

A：有難うございます。意識してくれて嬉しいです。詩や曲を適切に感じ取り表現するためには、ラテン語にしても日本語にしても明瞭な言葉が不可欠です。またメロディーをただ歌うだけではなく、音楽のフレーズや詩のフレーズを適切に歌う力なども必要になってきます。そのためには発声はもちろん、練習指導を受ける中で、音楽で表現する力を少しずつ会得することが必要になります。その意味からも、私に出来ないヴォイストレーニングの指導だけではなく、音楽的な表現まで指導して下さる専門的な指導者が、神戸では欠かせない存在だったのです。

Q：神戸は指導の先生方が多く、とても恵まれていると感じていますが、そんな理由だったのですね。

A：神戸ではまず５人の声楽家に指導スタッフをお願いしました。ソプラノが緋田芳江さん、北爪かおりさん、アルトが栗木充代さん、テノールが眞木喜規さん、バスが緋田吉也さんでした。ソプラノ、アルト、テノール、バスそれぞれの声の違いも実際に間近で聴いて知って欲しかったのと、皆さん宗教曲に造詣が深く、演奏にも秀でている素晴らしい演奏家であり指導者です。また指導していく中で同じことを指摘しても、指導者が変われば表現が変わります。そんな多面的な経験をし、いろんなことに気づいて欲しいと思っていました。

Q：まだまだお聞きしたいことがあるので、話をレクイエムに戻しますが、実際はどれくらいの期間で作曲されたのですか？

A：団員ひとりひとりが震災から13年という時間を経て、ようやく少しずつ語ってくれる悲しさや苦しさに毎回の練習で耳を傾け、反芻しながら少しずつ作曲を進めたので、全10曲が完成するまで１年ちょっとかかりました。先ほどもお話したように、団員の中には合唱が初めてという方も大勢いましたが、１年ほどかけて練習すれば何とか歌えるようになることを前提に、できるだけシンプルな楽曲を心掛けつつ、「歌う意味」を考える糸口、そして「表現」することの糸口になる楽曲でもありたかったので、チープなものにならないよう心掛けました。

歌う人たちが出来るだけスムーズに音楽に入っていけることをまず最優先に、楽曲のフレーズを考え作曲したのです。難易度の高い楽曲を好んで練習される合唱関係者の中には、音符や和音がシンプルなものを馬鹿にする人たちもいらっしゃいますが、シンプルなものほど難しく、豊かに表現することは難しいのです。

Q：2009年の第５回『追悼コンサートいのりのとき』で『レクイエム』の一部を初演されましたが、何曲くらいあったのですか？

A：「怒りの日」「出会いと別れ」「あの日の悲しみを忘れない」「未来に向かって」の４曲です。「出会いと別れ」はソロアンサンブル曲ですので、合唱団が歌う曲という意味では３曲ですね。

Q：1年後の2010年、つまり阪神・淡路大震災から丸15年となる年の第6回『追悼コンサートいのりのとき』で、目標どおりレクイエム全曲を初演されます。神戸文化ホールの大ホールがほぼ満杯になる、2000人近いお客さんの心を打つコンサートだったと、先輩たちから聞いています。

A：合唱団員、プロの声楽ソリスト、オーケストラなど総勢約140名が舞台に立ちました。皆さんそれぞれの思いを重ねて、時には涙を流しながらご来場者の心に届く演奏ができたように思っています。新聞で広く公募した、亡くなった人への思いや次世代に託す百文字メッセージの朗読も行いました。この朗読にはNHKと朝日放送、フリーといった立場の違うアナウンサーが複数参加して下さり、異例のことでもありました。

アンコール曲のあと舞台から見た来場者の表情は、ハンカチで涙をぬぐう人、顔をほころばせて微笑んでいる人、いつまでもいつまでも拍手をして下さっている人など様々でしたが、多くの方々に何かが伝わったと実感しました。当時の団員の皆さんの思いが、この成功を導いたのだと思います。

Q：合唱団の練習としては1年半でした。その間、何か団員の中で変化はあったのですか？

A：とても嬉しい変化がありました。2008年の練習開始当初からしばらくは、皆さんが抱えている悲しみや苦悩を反映して、とても重苦しい何かがありました。そして自己紹介を続け、相互に語り合ううちに、被害の程度の差から生じていた様々な誤解や温度差が次第に薄れていき、歌に思いを託

していくうちに皆さんの表情が明るくなっていきました。

更に、次第に団員が増えていき、2009年のコンサートを聴いて下さった方々が何人も参加され、いつの間にか100人を超える合唱団になっていた時は、有り難かったですね。そして2010年のレクイエム初演を終えた後の、心の奥底に閉じ込めてきた悲しみや苦しみを解き放ったかのような団員の皆さんの温かい涙と笑顔が忘れられません。

Q：私もそのときから参加したかったと思うようなエピソードですね。ところで、いつもお話に「思いを重ねる」「心を重ねる」という言葉がでてきます。このインタビューを読んでいただいている方々に是非、その意味を伝えて欲しいのですが。

A：日本人は、「心をひとつにして」とか「思いをひとつにして」という言葉が好きです。それを否定するのではありません。ただ被災地には様々な思いがあり、被害の違いや災害後の復興状況の違いから温度差も必ずある。そして戦争で傷ついた地域の場合は、特に経験していない世代が私を含め大半になってしまっている現在、同じにはなれない部分もあるわけです。

そうであっても、皆さんはレクイエム・プロジェクトの趣旨に賛同し、参加してくれています。つまり同じ方向を向いて活動しているはずなのです。それらのことを考えると、「ひとつにして」と言うよりは、「重ねて」「重ね合わせて」の方が、個人的にはより相応しいかなと感じ、様々な思いがそれぞれ共存出来て、重層的であり豊かだと思っています。

Q：他にも使わないようにされている言葉があったように思いますが。

A：それは「支援」と「絆」です。このプロジェクトは、基本的に被災者の方々が自ら参加するものであると同時に、私自身が多くのことを学びながら、被災地の思いを私なりに合唱作品にしていく「場」でもあります。ですから「支援」とは異なるものだと思っていますので、私自身はその言葉は使わないようにしています。東日本大震災直後に行った、義援金を被災地に送るためのコンサートでは、あえて緊急支援、被災地支援という言葉は使いましたが、活動そのものでは使っていません。

そして「絆」という言葉も、このプロジェクトを主宰している私が使うと、何か違うような気がして一度も使ったことがありません。活動が全国に広がり、自然につながっていく合唱団の人たちの関係は、「絆」というよりも「同志」に近いものだと私は感じています。あくまで個人的な考えですが。

2. 神戸から他地域への展開

Q：プロジェクトを他地域へも広げようと考えたきっかけは何ですか?

A：当初この活動は、地域も期間も限定した神戸だけのものと考えていましたが、コンサートを目前に控えたある日の練習の際、100人程の団員に震災時の思いやプロジェクトへの意見などについてアンケートをとりました。すると活動の継続を希望する人が、7割を超えていたのです。ルミナリエの音楽を作曲した人間という以外に私のことを知らなかったはずなのに、趣旨に賛同して活動を共にしてくれた人たちの多くが、続けたいと思っている。それは主宰者・作曲者としてはとても嬉しく有難いことでもあり、その気持ちに応えたいと思いました。

国内には自然災害や戦災で傷ついた多くの地域があります。せっかく活動を続けるのなら、神戸だけにとどまらず国内の被災地にも広げていこう、そして各地で心の痛みを抱えている人と「つながって」いこうと提案しました。そしてコンサートの終わった翌月、2010年2月から早速、他地域へのアプローチを始めました。それと同時に、神戸の合唱団では私をサポートしてくれる「世話役（後の実行委員会）」組織が生まれ、より充実した活動を行うことになります。

Q：神戸だけにとどまらず国内の被災地にも広げていくことは、すでに考えていたことなのでしょうか。

A：神戸の人たちが「プロジェクトを続けたい」と言ってくれるまでは、全く考えてもいませんでした。続けるならその意味があることとは何なのか、どういう可能性があるのかと、そこで考え始めたわけです。

Q：他の被災地とつながっていくといっても、そう簡単にはいかないと思いますが…。

A：もちろん、そうです。地域の状況はそれぞれ違っていますし、地域性や気質も異なります。プロジェクトを行うには、神戸と同じ方法ではうまくいくはずがありません。それぞれの地域ごとに異なるアプローチが必要になってくることは目に見えていました。「つながる」ということがどういうことなのか、それは私自身がまずそれぞれの地域の人たちと実践し、信頼関係を築いていかなければ、各地の参加者が相互につながることも不可能です。そのためには自分が動く以外に方法はないと思っていました。

神戸の場合は、ルミナリエとの関りがあったからこそ実現できたと思います。もしそれが無ければ、いくら関西出身者だとしても、難しかったでしょうね。作曲家としての上田益を知る人は限られます。その人間が主宰する「レクイエム・プロジェクト」に対して、興味を持って下さることは殆ど無く、懐疑的あるいは否定的な反応が返ってくるのが自然かもしれません。

金儲けに来たのか? あるいは被災地を利用して有名になりたいのか? と誹謗中傷されることも充分あり得ることですので、友人や知人がいない地域では特に、難しい面が多々あると考えていました。

Q：最初は沖縄からアプローチを始めたとお聞きしていますが、自然災害の被災地から始まったことを、なぜ戦災で傷ついた地域でもと思ったのですか?

A：そうですね。なぜ沖縄からかということも不思議に思われる方がたくさんいらっしゃると思います。私の中では、広島、長崎、沖縄は必然性があるのです。というのも、実は私は和歌山県の高野山にある寺の孫として生まれて、その寺を継ぐはずだったのですが、結果的には違う道を選びました。祖父が住職をしていたその寺に、画家の丸木位里、俊ご夫妻が約３か月滞在されて制作奉納された「原爆の図」２作品＜火、水＞がありました。そのことが大きな根拠となります。

Q：ということは、人生の選択が違えば、今頃はお寺のご住職だったのですね。たぶんそのことを知って、驚かれる方もたくさんいらっしゃると思いますが、お寺にあった丸木ご夫妻の「原爆の図」について、もう少し教えて下さい。

A：はい。なぜ祖父が住職をする寺に「原爆の図」があったかを詳しくお話するとかなり長くなりますので、要点だけをお話します。祖父は戦争が始まる前に、南方仏教の研究でタイの寺院に僧侶として入っていました。そして戦争が始まり、日本軍がアジアを侵攻していく中、軍の命令でビルマ（現在のミャンマー）に同行し、日本語学校を設立し校長となります。ビルマは凄惨な激戦地ですので、祖父はその惨状を現地で目の当たりにしたと思いますが、奇跡的に終戦の前年に帰国します。終戦後、政府派遣遺骨収集団に宗教者代表として参加し再びビルマを訪れ、激戦地を巡礼しながら遺骨や遺品を収集し帰国します。そして政府の許可を得てそれらの一部を譲り受け、高野山の寺の敷地に戦没者の供養と平和を願う摩尼宝塔（まにほうとう）を建立し、毎日祈り続けることになります。おそらく丸木ご夫妻に祖父が制作依頼し、その塔に奉納していただいたのだと思います。

私は小学生の頃からその絵をずっと見続け、祈りを捧げる祖父の姿を折に触れて見ていたのです。戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを、子どもながらに感じていました。そのことが、結果的に広島、長崎、沖縄でのプロジェクトにつながっていくことになります。

Q：お話を聞いていると、寺は継がなかったけれど、お祖父さんの遺志を継ぐような形で、プロジェクトの趣旨に「平和への願い」が新たに加わったのが、必然のように感じます。

A：無意識でしたが、きっとそうなのでしょうね。丸木ご夫妻は、広島と長崎の「原爆の図」だけではなく、「沖縄戦の図」も制作されています。その図にも描かれている悲惨な地上戦の場となった沖縄、今もなお基地問題という苦悩とジレンマを抱え続ける沖縄の人たちにとっては、本土の人間に対する不信感はきっと根強くあるだろうし、私の思いなどは戯言と受け止められるだろうと思っていました。プロジェクトを進めるにしてもかなりの時間がかかると思い、まず沖縄からと決めたのです。

Q：なるほど。でも実際に進めるのは大変だったと思います。本当はプロジェクトが広がった各地域について個別にたっぷり聞きたいところですが、それぞれの地域に関して少し教えて下さい。

A：これまで活動の開始順で言うと神戸、東京、沖縄、兵庫県佐用町、長崎、広島、仙台、南相馬、北いわて、気仙沼の10箇所で活動し、そのうち７箇所で現在も継続した活動を行っています。2010年にアプローチした地域は、沖縄、東京、長崎そして兵庫県佐用町の４つです。沖縄は2010年から沖縄戦終結70年を迎える2015年まで丸５年間活動しました。東京は2010年４月から活動が始まり、長崎は2010年に準備を始めましたが、実際に活動が始まったのは2012年９月から、そして佐用町は2010年11月からで、それぞれ現在も活動が継続しています。

Q：2010年に、いきなり新たな３つの地域で活動が始まるわけですね。何も問題なくスムーズに各地ともプロジェクトが始まったように感じる方がいらっしゃるかもしれませんが、実際は色々ご苦労されたのでしょうね。

A：自分が主宰して始めたプロジェクトですので苦労とは思いませんが、簡単ではありませんでした。音楽家の知り合いが一人もいない沖縄のような土地は他にもあり、そこではまず協力してくれる人を探すところから始まりました。特に沖縄では同じような趣旨で活動している合唱指導者を探すことから始まりました。

各地域で最初にお話することは、趣旨はもちろんですが、レクイエム・プロジェクトはコンサートを目的とした一過性のイベントでは無いということです。通年の継続した活動が前提で、その中で被災者の方々が悲しみや苦しみ、そして追悼の思いを共有・共感し合いながら、「歌うことの意味」を見つけていくということ。そしてコンサートはその過程にあるものだということなどを理解していただき、外部の人間である私への警戒心を少しずつ解いていく時間が必要です。お話させていただくためには、現地に私自身が何度も足を運び、直接お目にかかってお話するしかありません。すべての地域の状況が違うわけですから。

Q：同じ兵庫県内の佐用町は水害に見舞われた地域ですが、やはり当初動き出すまでは難しかったようですね。

A：そうですね。同じ兵庫県内であっても、このプロジェクトを理解していただくことがいかに難しいかを実感しました。想定内のことでしたが、全く未知の活動、しかもよそ者である私自身が何をしようとしているのか困惑する人がたくさんいらっしゃったと思います。ところがその佐用町も今年活動８年目を迎え、合唱団の人数は少ないものの、積極的に活動に取り組んでくれています。そして何よりも活動１年目に作詩作曲した「大切なふるさと」は、プロジェクトから独り立ちして全国の様々な合唱団で歌われる楽曲の一つになっていることは嬉しいことです。

Q：佐用で生まれた「大切なふるさと」が果たしている役割は、本当に大きいですね。広域展開のアプローチを始めた翌年の2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。未曾有の大災害でした。プロジェクトの主宰者として何を考えましたか?

A：あの日は、阪神・淡路大震災を経験した団員にとっても、私にとっても起こってほしくない大災害が起きてしまった日でした。実は前日の3月10日は、東京大空襲の日でもあり、東京のプロジェクトではその惨禍への思いを馳せたコンサートを行っていました。参加していた神戸の合唱団の有志も、翌日ゆっくり東京で過ごしていた人たちは揺れに見舞われ、交通の大混乱に巻き込まれました。

私も東京の自宅で震度５強の揺れを体験しましたが、東京近郊が震源の地震ではない気がしてテレビをつけました。次から次へと大変な状況が伝わってきます。信じられない大津波、逃げる人たち、なぎ倒される美しかったはずの松林、漁船も家も車も人も、何もかもが押し流されている。その場所で営まれていた生活が波に呑み込まれている。信じられない光景でした。

プロジェクトとしてすぐにできることは、まずは被災地へ義援金を送ること。すぐに行動しようと考えました。

Q：それでどうされたのですか?

A：震災発生から数日後、神戸と佐用町の団員に連絡をして、緊急支援チャリティーコンサートの実施を提案し、可能な限り早急に行動することを団員全員の賛同を得た上で確認しあいました。その結果、ホールや舞台スタッフなどの関係者の協力も得ることもでき、3月19日に佐用町、3月25日に神戸でチャリティーコンサートを開催することができました。

佐用町では、お小遣いを貯めた貯金箱を胸に抱えてきた小学生が、印象的でした。水害の心の傷がまだ癒えない佐用町の団員、あんな大災害は2度と起きてほしくないと思っていた神戸の団員、そして指導者である声楽家やピアニストそれぞれが、追悼と東北の被災地への思いを込め、演奏しました。

Q：東日本大震災の被災地でのプロジェクトを考えましたか?

A：神戸では、震災から13年目の年にプロジェクトを始めました。東北ではもっと時間が必要だと思っていました。それでも不思議なご縁や、きっかけがあり、震災後の早い段階で少しずつ動き出すことになります。

Q：具体的にはどこから動きが始まっていくのですか?

A：ご縁があって最初に東日本大震災の被災地を訪れたのは、岩手県野田村が最初でした。震災からわずか３ヶ月しか経っていない2011年7月初旬のことでした。野田村には、陸前高田と同じように素晴らしい松林が続く海岸・十府ヶ浦（とふがうら）がありました。それがことごとく津波で流され、漁港も三陸鉄道の線路も流され、更にはそれよりも陸側にあった住宅もことごとく流された状況を目の当たりにしました。

そして野田村の合唱団『コールわさらび』代表の大澤和子（おおさわかずこ）さんと会い、詩人の宇部京子（うべきょうこ）さんと巡り合い、紆余曲折を経て、『レクイエム・プロジェクト北いわて』の活動が野田村で始まったのが2013年12月です。その後、久慈市長の遠藤譲一（えんどうじょうじ）さんのお力添えで、久慈市教育委員会のサポートなども得て、活動も充実していきました。

Q：その他の被災地はどのようなきっかけだったのでしょうか?

A：野田村を訪れた後、東京のプロジェクトに参加してくれていた岩手県出身の声楽を学ぶ芸大生に、被災地の知人たちがレクイエム・プロジェクトに対してどんな印象を持つか、リサーチしてもらいました。結果は、こと

ごとく否定的なものでした。それは直近に起こった大災害の被災地の反応として、当然のことだと思っていたので、無理に東北で進めることは控えていた部分があります。それに加えて東北在住の友人や音楽家の知り合いが、全くいませんでした。どうアプローチしたら良いのか見当もつかない状況だったのです。

ところが、ご縁というものは不思議です。沖縄プロジェクトで2012年に行ったオーケストラとのコンサートに、仙台から子供を連れて避難していたヴァイオリニストが、演奏に参加していたのです。そしてコンサート後の交流会で、ご主人と離れて沖縄で暮らす彼女は、私のところに来てこういったのです。「仙台でプロジェクトはされないのですか? きっと賛同する仙台フィルのヴァイオリン奏者を知っています。連絡するので、是非会って下さい。仙台でレクイエム・プロジェクトを実現して下さい」。

Q:それはすごい出会いですね。鳥肌が立ちそうです。

A:私にとっても感動ものでした。こんなこともあるのだなと思いました。2012年の9月に、紹介していただいた大友靖雅(おおともやすまさ)さん、そして彼が連れてきてくれた同じ仙台フィルでインスペクターをされている我妻雅崇(わがつままさたか)さんに仙台でお目にかかりました。大友さんも我妻さんも、どうやれば出来るかということから話がスタートし、実行委員長と指導は工藤欣三郎(くどうきんざぶろう)先生しか考えられないとのことで、工藤先生にその後初めてお目にかかり、お願いをし、かけがえのない存在として現在に至っています。

最初のコンサートは2013年11月で、東日本大震災被災地で最初のプロジェクト・コンサートになりました。神戸や東京のプロジェクト合唱団有志のほか、大船渡を拠点とする「けせん第九を歌う会」と陸前高田の「高田合唱団」有志の皆さんも参加しました。

Q:大船渡や陸前高田からも参加されたのですね。特に被害が甚大だった地域でもありますが、参加されたきっかけはどんなことだったのですか?

A:震災の翌年、2012年1月に陸前高田、大船渡を訪れました。それは甚大な被害を受けた被災地を、自分の脳裏に焼き付けておくというか、追悼というプロジェクトの一番の基本がブレないようにするためでもあったのです。そして、知人から「けせん第九を歌う会」の指導者である千葉久美子(ちばくみこ)さんを紹介していただき、お目にかかりました。プロジェクトのお話はさせていただきましたが、「いつか歌えるようになったら、この曲も歌って下さい」と、その時点で出版されていた「レクイエム〜あの日を、あなたを忘れない〜」と「黙礼」の楽譜をお渡しするに留めました。ところが、楽譜をお渡しして早い時期に練習を始めて下さっていました。

そしてある方からの情報で、東日本大震災後に最も早く被災地で私のレクイエムを歌って下さった合唱団があると伺い、千葉さんにお尋ねしたところ、陸前高田の「高田合唱団」だとわかりました。そして千葉さんにも同席していただき、指導者の伊藤祥子(いとうじょうこ)さんとお目にかかったのが、2013年5月のことでした。

そんな出会いが、2013年6月の『けせん第九の会』の演奏会につながり、『黙礼』から“祈る”“風”“生きる”が演奏されることになります。そして仙台のプロジェクトに2013年から参加へとつながっていくのです。「けせん第九を歌う会」そして「高田合唱団」のどちらも、津波でメンバーを亡くされています。それだけに、プロジェクトのコンサートに参加される思いは深いものがあります。

Q:「けせん第九を歌う会」の皆さんによる「黙礼」の中の“風”は、報道ステーションでもオンエアされましたが、あの時の演奏はお一人お一人の万感の思いが伝わる演奏でしたね。

A:震災から3年目を翌日に控えた3月10日の生中継でしたね。すでにその時には、団員のほとんどの方と面識があったので、その皆さんの演奏にくぎ付けになりました。

Q:そして南相馬ですが、その「黙礼」がきっかけになったようですが。

A:はい。順番は前後しますが、南相馬は、震災直後から詩人の和合亮一(わごうりょういち)さんと取り組んだ混声合唱組曲「黙礼」の舞台ともいえる地域なのです。2011年10月に東京のプロジェクト・コンサートで初演されることを、新聞記事で知った方からの問い合わせがきっかけになりました。その方は南相馬の「ゆめはっと合唱団」メンバーで、その曲を歌いたいという希望でした。その合唱団も、津波で団員が何人も亡くなっています。震災後やっとの思いで練習を再開し、辛いけれども自分たちが歌うべき楽曲だという思いで、震災後初の定期演奏会で「黙礼」全曲を歌ってくれました。

その練習に立ち会うため何度か南相馬にお邪魔するなかで、プロジェクトのことをお話し、「ゆめはっと合唱団」だけではなく、被災された他の方々にも公募で参加していただき、実施しました。約1年だけの活動でしたが、2013年の春から約1年間活動し、2014年4月にコンサートを行

いました。仙台のメンバー有志や、福島市の飯野混声合唱団有志、そして神戸や東京からもメンバー有志が参加し、「つながる」ことが次第に定着してきたことを実感したプロジェクトです。

Q：南相馬では約1年間の活動だったということですが、継続されなかったのはどうしてですか?

A：このプロジェクトの場合、継続が基本的には前提なのですが、地域によっては難しいこともあります。直近の被災地の場合、様々な追悼の音楽イベントもあり、そこに参加する人たちが多い場合は、練習時間の確保が難しくなります。特定の合唱団が中心になる場合は、特にその傾向がありますので、南相馬はそれに該当します。公募で参加された方は、続けたいと思った方が何人もいらっしゃいましたが、無理をしませんでした。

同じように短期間の活動だったのが気仙沼です。気仙沼は本当に短くて、4か月でした。追悼の何かを始めるきっかけにしたいという要望があり、実施しました。

Q：海外経由で実現した地域もあるのだとか?

A：広島です。東京は私の拠点でもあり、レクイエム・プロジェクトに当初から関わって下さっている声楽家もいました。長崎は大学時代の親友がレクイエム初演を家族でわざわざ聴きに来てくれ、ずいぶん力を貸してくれました。

しかし広島は沖縄や仙台同様、誰一人知り合いがいない土地でした。長崎が動き出した2012年秋の段階でも、広島はどうやってアプローチを始めたら良いかもわからないままでした。そんなある日、Facebookで私のレクイエムに関することをやり取りしていた時、「そのレクイエムは、何語ですか?」と、デュッセルドルフ在住の声楽家・原令子（はらよしこ）さんからコメントが入り、「ラテン語です」と答え、一時帰国された際にレクイエムの楽譜とCDをお目にかかってお渡ししました。

原さんがそのCDを気に入って下さり、渡独後に車でずっとかけていた時、「この曲は誰のレクイエムですか?」と同乗していた同じく声楽家の植杉加奈子（うえすぎかなこ）さんが尋ねられたことから、原さんを介して植杉さんとFacebookでつながることになりました。

彼女のプロフィールを読んでいると、なんと広島出身だったのです。すぐに相談しました。そして現在、広島でヴォイストレーニングをお願いしている、声楽家の大島久美子（おおしまくみこ）さんを紹介してくれ、その大島さんから実行委員長と指導者はこの先生しか考えられないということで、佐伯康則（さいきやすのり）先生を紹介していただきました。そして広島プロジェクトの今があります。敬虔なクリスチャンでもある佐伯先生は、作曲家であり宗教曲にも精通するかけがえの無い存在として、支えてくださっています。「この先生しか考えられない」という点が、仙台の工藤先生と不思議に符合していますね。

Q：いろいろお聞きしていると、きっかけのひとつひとつが、何か見えない力に後押しされているような気がしますね。

A：確かにそうですね。自ら労を惜しまずに動いていくことで、何か見えない力に後押しされているなと感じることが今でも多々あります。

3.いきる　いのる　ねがう
被災地から世界へ

Q:『いきる　いのる　ねがう』これが、レクイエム・プロジェクトで作曲している楽曲すべての根底に流れるシンプルなテーマだ、と私家版のエッセイに書いておられます。それらの楽曲に団員それぞれの思いを重ねて、聴いて下さる皆さんに伝えていくことが私たちの役割だと思っています。

楽曲を振り返ると、活動地域の詩人の方と合唱作品に取り組まれていることがよくわかるのですが、これにはどんな理由があるのですか?

A:東日本大震災の被災地では、福島の和合亮一さん、岩手の宇部京子さん、そして沖縄では伊波希厘さん、広島・長崎では上田由美子さんという4人の詩人と作品に取り組んできました。それは、ひとつは「今」を生きている詩人の方々と、各地域の惨禍への思いを共有しながら、レクイエム・プロジェクトの趣旨も踏まえて詩を書き下ろしていただくことで、より明確なメッセージとしての「うた」が生まれると思っているからです。

もちろん誰でも知っているような詩人の作品にも、素晴らしいものがたくさんありますが、プロジェクトでの作曲は、レクイエム作曲の時もそうであったように、私の作品というよりは活動地域で懸命に生きている多くの被災者の方々の思い、そして更には「いのちへの思い」を、合唱作品という形にして残していくのが、私の役目だと思っています。詩人を探し、出会い、共に取り組むことも、その役目を果たすための大切なプロセスなのです。

私家版エッセイのメインタイトルは、「こころ重ねあう歌を求めて」なんですが、このプロジェクトから生まれた合唱作品が、より幅広い人たちに歌われ、プロジェクトに参加していなくても楽曲の底辺に流れる「いきる いのる ねがう」というテーマを感じ取ってもらい、同じ思いを共有できるようになれば嬉しいですね。

Q:すでにプロジェクト以外の全国の合唱団でも歌われていますが、これまでにプロジェクトで生まれ、出版されたものはどれくらい広がっているのでしょうか? 意外にプロジェクトに参加している合唱団員も、ご来場いただく人たちも、プロジェクトの中だけで歌われているように思っている人が多いかもしれませんので、教えて下さい。

A:合唱作品は、現在16冊が全音楽譜出版社とカワイ出版から出版されています。その内プロジェクトで生まれた作品に限定して言えば、同じ組曲で男声版と女声版両方で出版されている作品含め、13冊になります。プロジェクトの合唱団以外でその13冊に含まれている楽曲をこれまで演奏している団体は、色々あります。

私が把握しているのはほんの少しですが北から言えば、芸術集団ラクリモ座(札幌)、混声合唱団響友会(札幌)、高田合唱団(岩手)、けせん第九を歌う会(岩手)、岩手大学合唱団(岩手)、葛巻コールアロー(岩手)、コール・ユーベル(宮城)、フリューゲルあおば(宮城)、混声合唱団グラン(宮城)、コーロ・カナリーノ(宮城)、こ～る・なんざい(宮城)、横手混声合唱団(秋田)、ゆめはっと合唱団(福島)、飯野混声合唱団(福島)、東京芸大声楽科学生有志による特別編成の混声合唱団(東京)、ハイドン・コレギウム合唱団(東京)、混声合唱団ステラマリス(東京)、労音おおくぼ合唱団(東京)、くにたち混声合唱団ときわ(東京)、混声合唱団あかり(東京)、横浜YMCA混声合唱団(神奈川)、東海大学混声合唱団(神奈川)、伊勢原混声合唱団(神奈川)、竜ヶ崎混声合唱団(茨城)、女声コーラス コール・ドルチェ(埼玉)、常葉学園菊川中学高校合唱団(静岡)、コール・ノルテ(静岡)、クール・グルヌィエット(静岡)、静岡女声合唱団(静岡)、静岡大学混声合唱団(静岡)、静岡混声合唱団TERRA(静岡)、長円寺讃祷歌合唱団(長野)、南山大学スコラ・カントールム(愛知)、小牧市民合唱団(愛知)、アンサンブル・アワーズ(京都)、京都ゲバントハウス合唱団(京都)、吹田混声合唱団(大阪)、大阪薬科大学混声合唱団(大阪)、泉の森ハーモニー(大阪)、河南混声合唱団(大阪)、女声合唱レガーテ(大阪)、混声合唱団キアラ・コンパニーア(大阪)、堺市民合唱団(大阪)、合唱団泉北(大阪)、泉南混声合唱団(大阪)、『唱歌の学校』心のうた合唱団(大阪)、神戸市混声合唱団(兵庫)、女声合唱コール・ハイフォニカ(兵庫)、東広島女声 Via Lactea(広島)、女声合唱団La claberina(広島)、女声合唱団・彩が丘コーラス(広島)、福岡大学混声合唱愛好会プレミエールコール(福岡)、北九州記念混声合唱団(福岡)、九州大学コールアカデミー(福岡)、純心コールマリーヱ(長崎)、城岳混声合唱団(沖縄)、つしま丸児童合唱団(沖縄)、浦添少年少女合唱団(沖縄)、沖縄・名護ジュニアコーラス(沖縄)などなど、ずいぶん広がってきました。

Q:少しお聞きしただけでも様々な合唱団で歌われていることがわかりますね。このプロジェクトに関わっている各地の合唱団員も、こんなに広がってきているとは知らなかったと思います。そして海外でも公演が行われるようになり、よりグローバルに活動や楽曲が知られるようになってきました。プロジェクトの立ち上げ当初に考えられていたラテン語をテキストとする意味合いが実践されているわけですが、海外公演を行うきっかけは何だったのでしょうか。

A:海外公演の最初は2012年、チェコのプラハでした。東日本大震災から1年後のことです。目的のひとつは、改めて海外の人たちにもこの未曾有の災害を思い起こして欲しいということから、東日本大震災の追悼チャリティーコンサートを行うため。もうひとつは、その機会に私のレクイエムをチェコのオーケストラでレコーディングして、CDとして形にしておくためです。そのことを通して、海外の人たちにこの活動や楽曲を知ってもらう機会を持ちたいと思いました。

Q:私もプラハでの追悼チャリティーコンサートに参加しましたが、なぜプラハだったのですか?

A:プラハという街は、私が個人的に大好きな場所だということがまずあります。それまでにも何度か訪れ、親しくなった日本人の友人がいました。その一人にプラハ交響楽団の打楽器奏者、本田淳子(ほんだじゅんこ)さんなど、力になってくれる人が何人かいたことが大きな理由です。その人たちのおかげで、在チェコ日本国大使館の協力や後援を得たり、プラハフィルハーモニー管弦楽団、キューン合唱団とのレコーディングを2012年3月下旬に、そしてドヴォルザークホールでの追悼チャリティーコンサートを同年4月1日に実現できたのです。

Q：その他にも、2014年にウィーン、2016年にイタリアでも公演が行われましたが、海外公演の目的はプロジェクトの趣旨との整合性を考えておられるのでしょうか？

A：もちろんです。レクイエム・プロジェクトの合唱団は、各地ともいわゆる合唱愛好家の集まりではありません。直接の被災者だったり、趣旨に賛同した人たちが、継続した練習や国内各地のコンサートに於いて思いを共有したり、お互いに共感し合いながら、合唱をとおして「追悼と未来への希望」そして「いのちへの思い」を伝えていくことを目的とする活動でもあるわけです。ですので、プロジェクトとして公演する意味がある場所で行っています。

また海外公演の場合、参加希望者だけではなく参加しない人たちも、同じ目標を持って練習に臨むことで、各地域のコンサート同様に、このプロジェクトの意味を再認識していただく機会にしています。そして必ず国内でも海外公演での演奏曲を取り上げます。そのことで、団員全員の努力が無駄にならないようにしています。

Q：公演先はどのように決めているのですか？

A：プロジェクトとして公演する意味がある場所ということで選ぶわけですが、例えばウィーンの場合は、プラハ交響楽団の本田さんがこの活動とレクイエムを気に入って下さり、聖シュテファン大聖堂で毎日のように行われているコンサートの統括などを行っているセクションの方に紹介してくださったことから始まりました。そして聖シュテファン大聖堂主催の公式グランドコンサートとして、大聖堂でレクイエム・プロジェクトのコンサートを開催しました。

その意味としては、東日本大震災の時に義援金など、多くのご支援をウィーンのカトリック教会などを通じていただいたことに対して、日本人として感謝の意を表すこと。そして震災から３年という年に、もう一度その犠牲となった方々への追悼の思いを、ウィーンの方々とともに音楽を通して共有することでした。

Q：ウィーンの公演は、プロジェクトの活動地域各地からたくさん参加することになりましたが、何人でしたでしょうか。

A：日本から８人の声楽ソリスト、仙台フィルメンバー有志４人、そして神戸、東京、広島、長崎および陸前高田・南相馬・仙台などの東日本大震災被災地の合唱団有志など、総勢158人が現地のプロ・オーケストラとともに公演を行いました。

Q：プラハに続いて私も参加していますが、すごい人数でしたね。被災地の仙台フィルからも参加して、現地のプロの人たちと共に演奏したあのコンサートは、プラハとはまた違った意味でとても印象深いものでした。演奏が終わってからも10分以上スタンディング・オベーションが続きましたね。

A：そうでしたね。プラハの時は、プロジェクト自体が始まって４年目に入る時期で、神戸と東京のメンバーが20人ほどと、ソリスト４人が日本から参加しましたが、あとは合唱団もオーケストラもすべて現地の皆さんでしたからね。ただ初めての海外公演で、自分の音楽が確実に伝わっている実感を持てたことが大きな収穫でした。

Q：直近のイタリア公演も意義あるものだったと思いますが、そのきっかけはまた違うのですよね？

A：イタリアは日本同様、地震国です。2009年にはラクイラという街が震災で大きな被害を受け、まだ復興半ばという状況にあります。そのラクイラを含むイタリアは、プロジェクトのコンサートを行う意味があると前々から考えていました。ウィーンの公演でお世話になったエムセックインターナショナルの丸尾直史（まるおなおふみ）さんと、そのことをお話していたことがきっかけになりました。

結果的にラクイラは経費の問題がネックになり、実現出来ませんでしたが、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂ミサでの演奏、そして演奏出来る機会がめったに無いシスティーナ礼拝堂での献唱、そしてラクイラ同様に震災の被災地でもあるアッシジの聖フランチェスコ教会、そしてフィレン

ツェのサンタ・トリニータ教会の４か所で、「復興祈念、平和への祈り」という趣旨のレクイエム・プロジェクト「バチカン・イタリア特別公演」を行うことができました。

そして、この公演のために作曲した「ミサ・ブレヴィス～平安への祈り～」が、アッシジでの世界初演に先立ち、ローマ法王への楽曲献呈という栄誉を、バチカン教皇庁から与えられました。

Q：イタリアも深く心に刻まれる公演でした。行程の最後にビデオ撮影のクルーの方からインタビューを受けたとき、感極まってなかなか言葉になりませんでした。気軽な演奏旅行とは違い、とてもハードな練習と10日間に及ぶイタリアでの行程でしたが、それだけに成し遂げた時の感動は大きかったです。

A：イタリアでも、すべての経験が意義深いものになりましたね。2016年は特別聖年の年でもありましたが、その記念すべき年にサン・ピエトロ大聖堂でのミサで歌えたこと、そして天から音が降りそそぎ、身体全体というか魂まですべてを優しく包み込まれる感覚を体験したシスティーナ礼拝堂での献唱、アッシジではジョットの絵画に囲まれた聖フランチェスコ教会をメイン会場に毎年行われている、「Assisi pax mundi（アッシジ・パックス・ムンディ）」という世界平和を願う音楽祭のオープニングコンサートとして、演奏の機会を与えられました。

このコンサートで一緒に演奏して下さった「Orchestra da Camera di Perugia（ペルージャ室内オーケストラ）」の皆さんの真摯な演奏も印象的でした。フィレンツェでは、レクイエムの５曲目「ラクリモーザ」で、涙する外国人の若い女性が特に記憶に残っています。

Q：海外公演では他にも印象的な瞬間がいくつかありますが、ひとつだけ紹介してください。

A：ウィーンで本番当日の昼間のリハーサル中にすごい瞬間がありましたね。レクイエムの８曲目「Agnus Dei （アニュス・デイ）」が静かに終わっていく中で、聖シュテファン大聖堂の鐘が鳴っているのに気が付きましたよね。鐘の音が、曲の最後数小節の和音の中の音だったので、鳴り始めは気が付かなかったわけですが、音楽の最後の部分とクロスフェードするかのごとく聴こえてきて、まるでレクイエムと同化しているように感じました。鳴り終わるまで待って、次の曲「光の彼方へ」へ入ると、今度は天の啓示のごとくステンドグラスから柔らかな太陽の光が差し込んできて、私たちを照らしてくれました。「いきる いのる ねがう」、その歌声は確かに届いているのですね。

Q：思い起こすと貴重な経験ですよね。これまで3回の海外公演がありましたが、今後の予定などはあるのでしょうか？

A：実は2019年10月にポーランド公演を予定しています。これまでの海外公演は、どちらかといえば自然災害の追悼という側面が強かったのですが、世界も日本も今とても危うい時代に近づいているように思います。ひたすら平和であって欲しいと願わずにはいられません。そして各地の合唱団のメンバーも次第に高齢化し、参加することも次第に難しくなるようにも思います。沖縄・長崎・広島で活動してきたプロジェクトとして、丸木ご夫妻の「原爆の図」をずっと見てきた私自身の思いとして、第2次世界大戦で夥しい数の人たちが犠牲になったポーランドはやはり訪れておきたいと思うのです。

ポーランドの大阪総領事館の名誉総領事だった方が、神戸の合唱団メンバーだった時期があります。仕事が多忙になったこともあり、今は在籍されていませんが、その方から在籍中に「ポーランドでプロジェクトを行う時は、是非相談してください」と言われていました。そんな不思議なご縁もあり、昨年の夏の終わりごろ、久しぶりに連絡したのです。そうしたところワルシャワ大学の日本学科の教授陣とつないで下さり、日本学科設立100周年の年の記念行事期間中に、交流のコンサートを大学のホールで行うことになりました。それが2019年10月なのです。

そしてこれまでも海外公演でお世話になっているエムセックの丸尾さんにもお力添えをいただき、プロジェクトの趣旨や活動内容に賛同して下さったクラクフ市が全面協力してくださることになりました。その結果、シフィドニツァの平和教会、クラクフの聖マリア教会、ワルシャワの聖十字架教会でのコンサートや献唱が予定されています。もちろんアウシュビッツも訪れます。

後から知ったのですが、驚くことに2019年は日本・ポーランド国交樹立100周年の年でもあるそうで、不思議な巡り合わせだと思います。

Q：神戸の元合唱団員の方がつなぎ、実現する海外公演。意義ある公演にしたいですね。

A：本当にそうですね。ただ誤解のないようにお話しておきますと、定期的に海外公演を考えているわけではないのです。2012年、2014年、そして2016年と2年ごとに海外公演を行いましたが、それは東日本大震災から1年、3年、5年という節目だったことと、必ずきっかけがあったことが大きな理由です。まず一番大切にしないといけないのは、それぞれの地域に根差した国内の活動です。そこがブレないように気を付けています。

Q：プロジェクトの発端となるルミナリエの作曲も、それまでの仕事の縁がきっかけになりました。「今まで携わった仕事すべてが、人とのつながりの中でこそ実現できた」と、エッセイでも述懐しておられますが、人の縁というものは、思えばほんとうに不思議ですね。

A：本当に不思議です。すべてがつながっています。ルミナリエの仕事をしなければ、私が主宰する追悼コンサートやレクイエム・プロジェクトは存在していなかったかもわかりません。

そうなると、神戸をはじめ各地の指導者の先生方や合唱団員の方とも巡り合っていません。また違った作曲家としての生き方をしていたと思います。なによりもこれほどたくさんの合唱作品を作曲していなかったでしょうね。

Q：かなり長時間のインタビューになりました。まだまだお聞きしたいことはありますが、ここまで目を通していただければ、レクイエム・プロジェクトの全体像が少しは分かっていただけるのではないかと思います。最後に、これからのプロジェクトの方向性などありましたら教えて下さい。

A：目新しいことをするつもりはありません。方向性も基本的には同じです。今年は広島・仙台・北いわてが活動5周年を迎えます。東京と佐用町は活動9年目、長崎は7年目に入ります。それぞれの地域を大切にしながら、少しでもきめ細かな対応をしながら、これまでと同じようにコツコツと活動を続けていきたいと思います。

今回のレクイエム・プロジェクト神戸2018には、約230人の合唱団員が参加してくれます。全国各地の活動地域の団員数の約半分の人たちが参加することになります。そしてこれまで練習や演奏を支えて下さった指導者の方々、そしてピアニスト、オーケストラの皆さんも多数参加してくださいます。感謝の言葉しかありません。本当に有難うございます。

各地の合唱団は常時団員を募集しています。新たな参加者を心からお待ちしています。

その後の５年

それは、まさしくコロナ禍の中での苦闘と言っても過言ではありません。
現在もまだ続いています。

2019年秋にポーランド公演を行えたことは幸運でした。しかしその翌年３月からは練習の中止、コンサートの延期など翻弄されていく中で、2020年６月下旬から各地の感染状況を考慮しながら順次練習再開していく決断をします。その時に関係者全員に送った文書があり、記録として全文ここに掲載します。「試行錯誤しながら、懸命に活動を続けてきた５年間」という言葉に尽きると思います。無観客や人数制限を強いられるコンサートのチラシやプログラムには、「希望と日常を取り戻すために!」と必ず記載していました。

関係者の皆様

2020 年 6 月 10 日

レクイエム・プロジェクト　代表：上田 益

レクイエム・プロジェクト　合唱団練習再開の準備開始と
それに伴う新型コロナウイルス感染対策について

【はじめに】

今回の新型コロナウイルス感染拡大の状況を受け、３月半ば頃より各地で順次練習休止の措置を講じてきましたが、緊急事態宣言の解除や平常化に向けた各地の取組が始まっていることをふまえ、プロジェクト実施地域において、合唱の施設利用が可能な地域から、順次練習再開の準備を始めます。

再開にあたっては、各自治体もしくは施設の指針を遵守しながら、それぞれの地域の状況に即した対応を行います。

ただ合唱や合奏などへの世間の風当たりはまだまだ強く、プロジェクト関係者の中でも様々な意見があることは充分承知しています。そして仮に出来うる限りの対策を施したとしても、感染のリスクがゼロになるわけではないことも事実です。練習で感染しなくても、地域によっては行き帰りの交通機関や途中立ち寄った場所で感染する可能性も皆無ではありません。

それらを踏まえると、当面の間は指導者・団員それぞれが、ご自身のお気持ち、仕事やご家族などご自身を取り巻く状況を検討していただき、参加もしくは参加見合わせの選択をお願いすることになります。ご家族の理解が得られない場合は無理せず、参加可能な時期が来るまでお待ち下さい。

途中からの参加も可能ですし、いったん参加したけれど途中で「やはり自分はしばらく参加を見合わせておきます」でも構いません。つまり練習再開に関し、休止前の状態に拙速に戻そうとするものではないことをご理解下さい。

練習再開にあたっては、活動継続の意思をお持ちの団員で、まだしばらくは参加できそうにないと判断された方のために、練習日ごとの内容の発信や自己練習用のサポートを行う予定です。取り残されることがないよう、可能な限りの対応をおこなっていきます。

なぜ練習再開の準備を始めているのかということですが、下記の理由によります。

それは歌うこと、歌を通して表現すること、人が集い精神的な何かを共有することで、支えられてきた精神生活の「質」や、「心」に関わる大切な部分が、プロ・アマチュアに関わらず、このコロナ禍により失われようとしていると考えるからです。

そしてそれは歌に限ったことではなく、音楽や芸術、エンターテイメントに関わるすべての人たちに共通する大きな問題でもあります。

必ずやってくると言われている第二波、第三波があるとしたら、ウイルスとは長い付き合いを前提として生活することになります。それは自粛というよりも共存せざるを得ない状況になるということであり、その中で少しでも心豊かな生活をしていくための工夫が必要だと、私は考えます。

命を守ることはもちろん一番大切なことですが、本当の出口が見えない状態が続くと予想される現状において、いつまでも我慢を重ねるばかりではなく、心が死んで「生きる屍」のようにならないためにも、練習再開の可能性を前向きに考えたいと私は思います。

そして再開後は、感染拡大の状況に再びなれば、速やかに活動休止の体制に入る判断も必要だと考えます。
しばらくは休止と再開を繰り返す対応をせざるを得ないかもしれません。しかし「希望」という心の灯を消さないという意味においても、再開の見通しも示せないまま延々と休止を続ける場合と、休止と再開の試行錯誤を繰り返しながら少しでも前に進むのとでは、大きな違いがあるように思います。

練習再開にあたって感染リスクへの対策に関する基本的な考えをまとめておきます。下記をよく読んで下さい。練習再開に関する日程や、練習時における各地域それぞれの対応に関しては別紙でご連絡しますが、下記の【全体的なこと】【入室・受付】に関しては特に重要であり全地域共通です。必ず守って下さい。

【全体的なこと】 ※重要!全地域共通

・参加または参加見合わせに関しては、個人の自由意思により判断して下さい。強制ではありません。
・原則的に施設もしくは自治体の指針に沿って、感染対策を行います。
・今後の会費など、運営面に関しては地域ごとに別途ご連絡します。
・参加する場合、必ず家を出る前に体温を測って下さい。37度以上ある場合は参加できません。
・発熱、咳、のどの痛み、倦怠感など、風邪と似た症状がある場合は、参加できません。
・同居家族や身近な知人に感染が疑われる人がいる場合は、参加できません。
・練習参加後、2週間以内に新型コロナウイルスに感染した場合は、速やかに上田益または実行委員に連絡をお願いします。その連絡に基づき、ただちに施設への連絡を行い、その地域の練習を休止..。その後の対応を施設などと協議検討したうえで関係者にも連絡します。

【入室・受付】 ※重要!全地域共通

・練習開始前に、各会場共に充分な換気を行ってから練習を始めます。
・入室する場合は、その前に必ずマスクの着用をお願いします。入室後もマスクの着脱に関しては、指示に従って下さい。自分でマスクを勝手に外さないよう、ご注意ください。
・入室時には、施設または会場に備え付けのエタノールなどで手指の消毒を必ず行って下さい。
・原則として当面実行委員は対面での受付業務を行いません。入室時に必ず自分で出欠簿に〇（マル）印を付け、自宅で計測した体温を記入して下さい。
・会費は名前を明記した袋に入れ、所定の箱に各自で入れて下さい。

【練習に関して】 ※別紙、地域ごとの対応も必ず確認してください。

・指導者、ピアニスト、団員の間隔をできるだけ開ける（原則2m）ため、人数制限を行います。
・いずれの会場も、一度に入室できる人数を当面は会場定員の50%以下とします。
・人数制限に伴い、2グループあるいは3グループに分かれて、時間差による練習を行います。
グループごとの練習時間が短くなりますが、ご理解ご了承ください。
・練習時は、別途定める地域ごとの対応策に沿ってフェイスシールド（実行委員会で用意）とマスクを使いわけます。
フェイスシールドとマスクの両方を使用し、使い分けに関しては練習内容に応じて、指導者が指示します。地域や会場によっては、短時間フェイスシールドとマスクを外せる場合もあります。
※マスクはあくまで飛沫の飛散量を少しでも減らすため、フェイスシールドはマスク使用時の息苦しさを一時的に回避し、飛沫が直接飛散したり受けたりすることを軽減するために使用。
・15分～30分に1回、5～10分程度（会場により変化）ドアや窓を開放し充分な換気を行います。

【休憩、退室】

・換気の時間を休憩ととらえ、練習との時間配分は、その都度指示します。
・休憩時もマスク着用ですが、接近しての会話はお互いに注意して控えましょう。
・必要に応じて、手指の消毒や手洗い、うがいをして下さい。
・退室時も少なくとも戸外に出るまではマスクを着用し、帰宅まで感染リスクを避け、気を付けてお帰り下さい。

いつでも活動に戻ってこられるようその場を温めておきたい。
それが再開に際しての、そして今に続く思いです。

共に歌い、共に伝えて行きませんか？

被災から年月が経過していく中でも、まだまだ被災者の方々は
重く、苦しい、悲しみを抱え、それでもなお希望を見出そうと、
生かされた命を懸命に生きていこうとする人たちの姿があります。
そこには伝えていくべき「うた」の根拠がたくさんあります。

伝えていくべき「うた」の根拠は、
神戸にも、北いわてにも、仙台にも、南相馬にも、
気仙沼にも、東京にも、兵庫県佐用町にも、
広島にも、長崎にも、沖縄にも、
レクイエム・プロジェクトを行ってきた全ての土地に、
その根拠がたくさん存在します。
だからこそ被災地の詩人とともに合唱作品の創作に取り組んでいるのです。

その詩から生まれた音楽に込められた苦悩、悲しみ、希望などを、
各地の活動メンバーが共有し、共感し、その思いをコンサートで重ね合い、
そして歌として発信することで客席の人たちへと伝えていく。

それを繰り返すことで、いつしか人と人、被災地と被災地、
そして地域と地域が繋がっていく。
それがレクイエム・プロジェクトなのです。

● 募集パート	ソプラノ、アルト、テノール、バス　全パート　※ご夫婦、親子でのご参加も大歓迎です。
● 参加資格	趣旨に賛同いただける方。合唱経験は無くても構いませんが、ある程度楽譜が読める方。 ＜趣旨＞「追悼と希望」「大切ないのちへの思い」をテーマに、悲しみや苦しみ、未来への願いや生かされていることへの感謝と喜びなどをプロジェクトで生まれる合唱作品に託し、伝えていくプロジェクトです。
● 練習会場	雲内教会（阪急「六甲駅」南へ約5分）、ふたば学舎（地下鉄「駒ヶ林駅」約６分、JR「新長田駅」約13分）
● 練習楽曲	必須楽曲「レクイエム～あの日を、あなたを忘れない～（全10曲）」のほか、プロジェクトで生まれた楽曲。
● 練習日	原則として月３回。　※土曜夜18時～21時
● 会費	月額3,000円 ※入会金 1,000円、事務費 年１回1,000円。楽譜代は実費。
● 申込み方法	以下のいずれかの方法でお申し込み下さい。お申込みに際しては、お名前、ご住所、電話番号（携帯番号もできるだけご記入下さい）、メールアドレス（無い場合は不要）を、必ずお書き添えください。 メール：requiem@music.nifty.jp　ファックス：03-6701-7174 ※ 定員に達した場合は、その時点で締め切らせていただきますので、お早目にお申込み下さい。
● お問い合せ	メール、または携帯電話 080-5181-6692（担当：上田）まで。

技術の力で未来を支える

建設ファスニング技術を通じて道路・鉄道・建築耐震などの安全対策に注力し、社会の発展と環境づくりに貢献します。

GBRC 性能証明 第 01-03 号 改 2

ハイブリット耐震補強工法

本工法は、工事中の騒音や振動、粉塵を軽減できる特長を生かしながら、病院や学校あるいは事務所建築を中心とした、居ながらの耐震補強工事を可能としました。

内付工法　内装仕上げ例

外付工法　外観

ケー・エフ・シーはレクイエム・プロジェクトを応援します！

建技審証第 1203 号

せん断補強RMA工法

「既存ボックスカルバートや擁壁などの連続壁に対し、内空断面を侵さず補強を行いたい。」そんな希望にお応えするため開発されたのが、RMA 工法です。

RMA 工法施工前

RMA 工法施工後

【事業内容】
耐震関連工事の設計・施工及び環境・安全施設工事
建設用ファスナー類及び付属品の販売・施工
トンネル掘削用資材の販売

【事業所】
東京・大阪・名古屋・仙台
横浜・静岡・岡山・広島・福岡

KFC 株式会社 ケー・エフ・シー　http://www.kfc-net.co.jp